

331.74-Te24ㄅ



331.74
TE 24

戰時貯蓄讀本
帝國軍事協會發行



始



戰時貯蓄讀

933
350



331.74
7E 24



戰時貯蓄讀本

遞信省校閱
帝國軍事協會發行



序

米英に對し宣戰の大詔渙發せられて以來、御稜威の下皇軍の勇戰奮闘は、世界戰史にためしなき偉大なる戰果を收め、旬日を出てず既に敵の東亞に於ける主勢力を擊推して全世界を震撼せしめた。

我等は筆舌につくし得ぬ國民的感謝、感激の渦の中にある。然し今尙繼續せる日支事變が世界新秩序戰の魁をなした事實を顧み、今次の快捷に酔ふことなく、獨、伊、滿、支、泰の諸盟邦と共に俱に新しき世界建設の爲めに斷じて米英兩國を屈服せねばならぬ。戰勝には勿論優秀なる巨數の人口と莫大なる物資、資金とを必要とし獨り武力に依存するのみならず外交、經濟、科學、思想、宣傳等あらゆる部面に於て國家の總力を結集することが要請せられる。

日支事變勃發以來年々國民貯蓄目標が定められ、全國民に貯蓄を獎勵し國民亦之を實踐しつつあるが如きは、實に經濟戰線に於ける國民總從軍の一場面に外ならぬ。

勤勞を尙び節儉貯蓄を奨むることは、平戰時を通じ緊要なるのみならず何人も貯蓄に就き一應の心得を有するも、憾むらくは、重點を身の爲め將來に備へることに置き、猶

未だ貯蓄の國家的使命を充分明確に把握されてゐない様である。一死殉國の國民精神を以てせば、日頃冗費を省いて之を貯蓄すること程容易な御奉公はなく、『國思ふ心一つてまだ貯まる』のである。然るにこの戦時下、果して勤勞による所得さへ浪費する者、進んで勤勞せずして節約貯蓄の餘裕なしとなす者はないであらうか。節約貯蓄せず之を浪費するは、勞働を浪費するの結果ともなり、勤勞にいそしまずしては収入の増加は望み得ない筈である。

實に貯蓄報國こそは現今銃後國民の齊しく負ふ大きな責任であり、義務でもある。

本書の著者は夙にこの方面に於ける眞摯なる研究家であり、先達でもある。その深き造詣を傾注して説くところ、金の正しき觀念、金の力はもとより其の遣ひ方、貯へ方等に就き古今の事例を引用詳述して餘蘊なく、其行文亦暢達平易にして一氣に貯蓄の醍醐味を味得するに充分である。

爰に本書が大東亞戦争の序曲に上梓せられるに當つて、特に序辭を寄せて江湖に推奨する次第である。

昭和十七年七月

貯金局長 伊勢谷次郎



この本の
能書き

古今名うての武將ナポレオンは、戦争は一にも金、二にも三にも金だと言つた。地獄の沙汰も金次第だと言ふから、地獄の一丁目の戦争は、金次第で勝負がきまるといふのは無理もないことである。さうは思はれるが、さてこのを道理を押し進めて行くと、その金を『持たざる國』は、いくら兵隊ばかりが強くとも、結局戦争に負けることになるが、事實はどうぢやらう。ひよつとしたら、否、確實にそれは違ふ。寧ろ反對に、勝敗の数は金ぢやない精神だ、鐵石の如き男の意氣だとも考へられる。然らばその意氣だけで戦争に勝てるかといふに、これ亦違ふ。さうは參らぬ。然らばどちらか。金か、それとも精神か……と追ひ詰めて、往きつ戻りつ考へを廻らす中は、まだまだこの道を悟れないのである。

戦争も時代によつて本質が違ふ。金次第で勝負がきまつたのは昔のこと、近代戦は總力戦と謂はれて、この二つの双方とも兼ね備へて居らなければならぬ。即ち金と精神の双方を、より多く持つて

居る者が勝つことになつて居る。つまり鬼に金棒でなくてはならぬ。ところが實際は、さう詭らへ向きな國は、今の世界にない。どちらかが缺けて居る。そこでわれわれ日本はどうかといふに、精神の方は、世界廣しと雖も、凡そ追隨を許さぬ大和魂といふものを持ち合せて居る。鬼をも欺く無敵皇軍がそれだ。そこで、その鬼に持たす金棒を作るのが、われ等銃後國民の、いとも重大なる任務である。

金棒とは何か、無論武器のことである。即ち『物』だ、物資だ、物資を動かす力は何かと煎じ詰むれば『金』といふことになつて、われ等は『物』を作る反面に、各自が持てる『金』をして、その使命を果さしめなければならぬ。こう戦争に『金』の役割が重大であることに気がつけば、われ等は日頃『國債は戦費だ、戦費だ』といふ、寧ろ悲痛な叫びに、その耳を傾けざるを得ないであらう。この身の持てる一錢さへもが、斯くまで御國に役立つのか、仇には遣へぬ粗末に出来ぬといふ道理を、如實に説いたのがこの本である。(著者識)

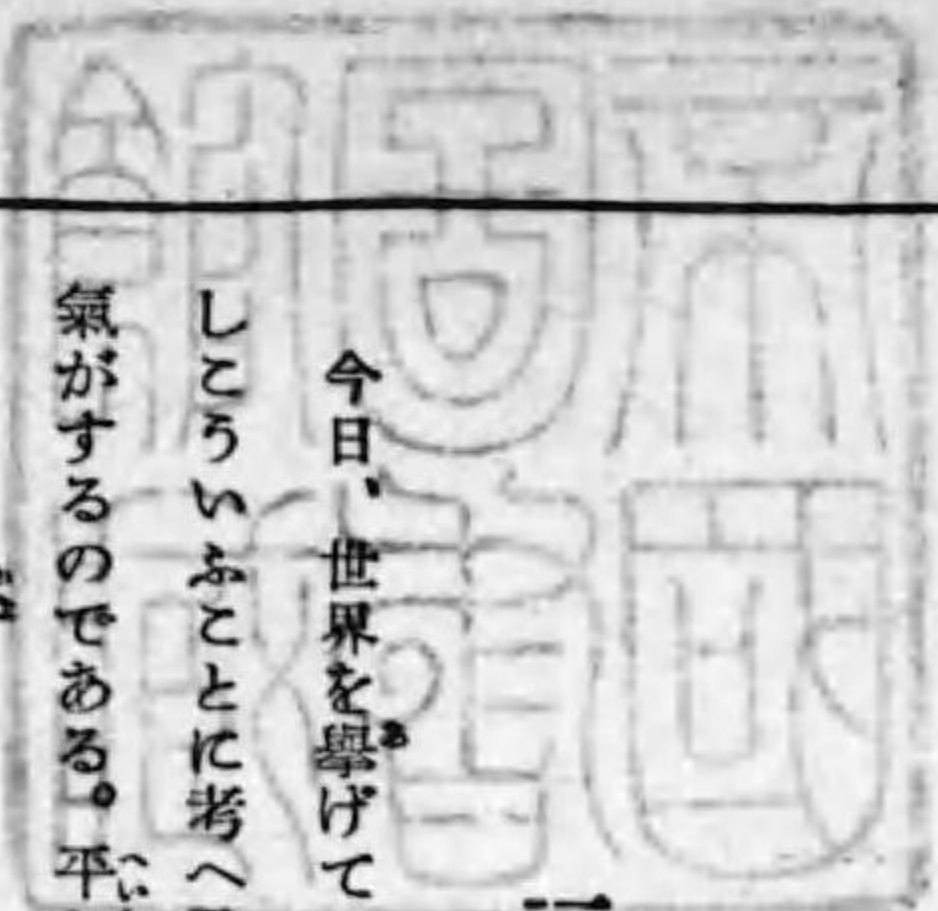
もくろく

- 一、世界の混亂は金の惡戯……………(一)
- 二、男金あつて墮落し女金無くして墮落す……………(四)
- 三、金は卑しむべきものか……………(六)
- 四、金の遣ひ方で人間が分る……………(八)
- 五、金は國家の預りもの……………(一三)
- 六、金と民族精神……………(一七)
- 七、日本精神はどういふものか……………(二〇)
- 八、日本精神は一體主義である……………(二六)
- 九、一體主義の金錢觀……………(三元)
- 一〇、金を活かして遣ふ人……………(三)

- 一一、理財の神 黒田如水……………(一四)
- 一二、聖將乃木將軍を憶ふ……………(一四)
- 一三、乃木將軍を學ぶことが出来るか……………(一四)
- 一四、ところで今の世相はどうか……………(一五)
- 一五、餘計なものはないでもせいたく……………(一六)
- 一六、金は至尊の象徴なり……………(一六)
- 一七、貯金は國ためわが身のため……………(一七)

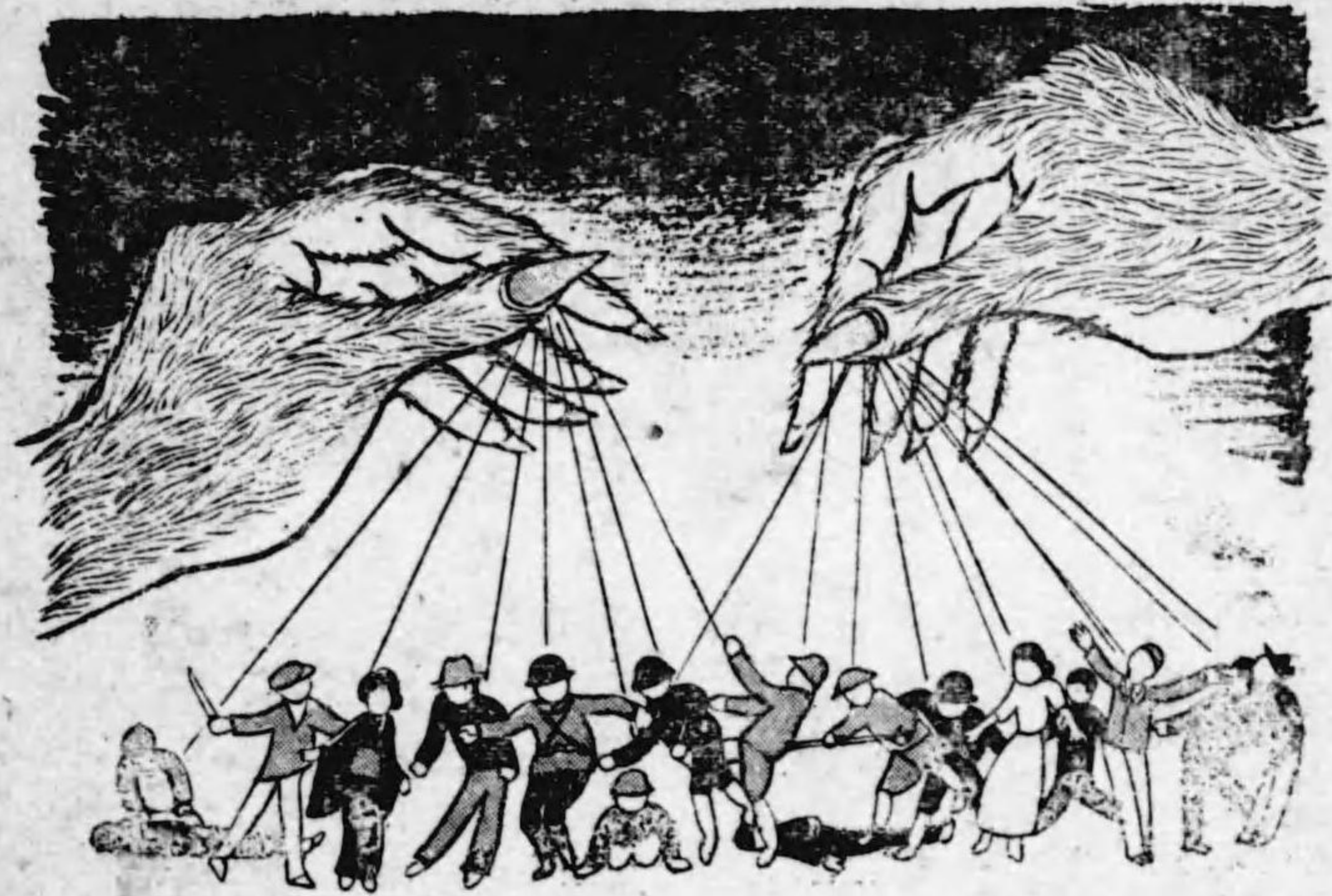
戦時貯蓄讀本

前田 義雄 著



一、世界の混亂は金の悪戯

今日、世界を擧げての大混亂は、その原因は、なんであらう。そして又、それを救ふの道は、なんであらう。人若しこういふことに考へ及んだ時、そこに何物か得んとして得ざるもの、何物か來らんとして來ざるものがあるやうな氣がするのである。平和な時であるならば、これが儘ならぬ世の中の習ひといふものだ。歌の文句にあるやうに、「思ふこと、叶はねばこそ浮世とは、よくあきらめた無理な言、」など、出來ないながらも諦らめやうもあらうが、喰うか喰はれるか、死ぬか生きるかの關頭に立たされた今の場合は、さう簡單には片附けられぬ。否が應でも、この問題は解決せなくてはならぬ。そこでこの、得んとして得ざるもの、來らんとして來らざるものとは、一體なんであるか、その正體を見届けてかゝらねば、策の施こしやうがない。ではあるが、それがなか／＼分らない。何かこの世の中を人間以上の力を持った魔物が、荒し廻つて居るかのやうに思はれてならないが、さてそれがなんであるかは、神なら



ぬ人間では到底分りさうもないのである。
昔から「泣く兒と地頭に勝てぬ」と、儘ならぬものゝ、代表的なものゝやうに譬へられて居るが、今こゝに詮索せんとするものは、そんな生柔しいものではない。世界の動きを、右往左往に狂はして、息詰るやうな世相に、人間全體を追ひ込んだ何ものとは、少くとも超人間的なものであることは間違ひはないであらう。

人間には眼界といふものがあつて、眼の届かぬところは見えぬ。それと同じく、精神にも心眼といふものがあつて餘り大きなことには考へ及べぬ。想像がつかぬ。そこで世界の動き、それはわれ／＼凡俗の考へ以上のものであるがそれを見るには、丁度、六ヶしい數學を解くやうに、出来るだけ問題を簡單に、そして小さくしてかゝることだ。すると今世界は舊い地圖を塗り變へなければ收らぬほどの大戦争が、東にも西にも行はれて居る。この戦争を小さく見れば、國と國との争闘であり喧嘩である。そこで喧嘩の原因は何か、こゝから

解いてかゝらねばならぬが、昔は男の意地とか、言葉のはづみとか、或は賣られた喧嘩だとかいふことが、多分に原因をなした。けれども今は、さう感情ばかりでは動かぬ。寧ろ、勘定で動くのである。算盤玉の違いが喧嘩のもとだとされるやうになつた。即ち『金』だ、金銭である物質である。これが人を、國を、世界を災する魔ものである。そして又、これこそ、人世の上もない厄介物だ。見方に依つては金銭こそ、人間生活の凡てである。さうして、これほど儘ならぬものは他に二つとはあるまい。人間好んで罪を犯す者は一人もない筈、然るに罪する人の九分通りはこの金の誘惑に負けた者ばかりであるといふ。なんと恐るべきは金銭であらうか。仇な金銭は、斯くて年々何萬人といふ人を牢獄に繋ぐのである。これは國內だけのことであるが、更に戦慄すべきは、全世界を災ひする金銭の悪戯である。

如何なる悪戯か、過去千年がかりで築いて來た今日の物質文明、その原動力となり指導力となつて來たものは、外ならぬこの金銭である。この流れを資本主義とも言ふが、要するに金銭の揮つた暴威は、長い間にいつしか「持てる國」と「持たざる國」の二つに、この世界を截然と分けて、持たざる國をして手も足も出せなくして仕舞つたのである。これでは持たざる國は生きる手段を失つたことになるので、その爆發が今東西相應じて火花を散らして居る大戦争だ。人命を失ふこと既に何百萬人、然かも停止するところを知らざる世界の修羅場は、もとを糺せば金銭の悪戯以外の何ものでもない。即ち金の力で全世界人類を支配しようとする英米と、さうさせまいとする日獨伊その他所謂樞軸國との戦争となつたのである。抗日支那軍如きも、要するにその傀儡のみ。

二、男金あつて墮落し、女金なくて墮落す

金はもとく死物であり、特に紙幣と言ははるものは一片の印刷物に過ぎないが、王侯の権力を以てしても思ふやうにならぬほど、不思議な存在である。だから古來支那では、金のことを錢神と稱して、人間以上の不思議な魅力を持つて居るものとされて居た。人は金錢を得んがために、凡てを捧げ、あらゆる努力を惜しまない。これを金錢の方から観るならば、金錢の力で、どんな偉い人間でも思ふやうに動く、どんな事でもさせられる。然しこうして一日人間の手に握られても、永久人間の捕虜になつては居らぬ。一度金錢が誘惑の偉力を發揮すれば、左右にその金錢が釋放される。金錢に若し口があれば、人間ほど愚かなものはないと言ふかも知れぬ。

さうして、人がこの金錢を得る時と、散ずる時の二つの場合を眺めると、多くの場合、得る時の眞剣さに似もやらず、散ずる時には、極めて放漫である。中には、粒々辛苦の結晶たることを忘れて、湯水の如く散じて惜しまぬ人さへある。「また儲かる」と思ふからでもあらうが、それにしても餘りに金錢の扱ひ方に表裏があり過ぎると言ふものである。併し、自分の力で得た金錢故、散ずることも自由だらうが、散じ方が悪いと、遂に一身を亡ぼすことに成り勝ちである。

給仕勤めをして居るわが兒の増収を圖らんがため、工場通ひに鞍替させたまではよかつたが、いつの間やら煙草を吸ひ始め飲酒を習ひ、時々酔ひどれて喧嘩さへして来る。そして遂には忌はしい病氣に罹つて、三倍の増収にも拘



らず家には厘毛の金も持つて歸らないとは、この頃珍らしくない話。新宿驛で不正乗客を調べたら、一番多いのは職工であつたさうな。浅草六區の所轄警察で不良狩りを試みたところ、今まで學生が多かつたが近頃では職工が大部分だと言ふ。成年に満たざる者で今一番収入の多いのは勿論職工であるのであるが、収入多きがために斯く身を誤る者の多いのは、即ち金錢を散ずる方法を誤つて居るからである。

事變前には収入の少なきことも原因して、朝夕の出入時間に分秒の相違なく手辨當で眞面目な主人を持つた家庭は、年中團欒として春風のやうな和かさであつた。然るに事變以來の収入増で、歸宅の時間も區々として一定せず、酒氣は日々高じて、もう正氣な主人の歸りを見ることが出来なくなつた。そればかりでない、最初は一日次には二日と、凡そ月に半分がほどは家に歸らず、それがため、残された家族は甚しい生活苦に陥つて居る家さへあると聞く。どうか嘘であつてくれよと思はれるこれ等の忌はしいことが、若しも事實

であれば、収入増が仇となつての爲體であり、これ男金あつて墮落する何よりの證據だ。
 女の場合はこれと反対。概して女性には、金ある時は極めて眞剣、厘毛と雖も仇には散ぜぬことを鐵則として居るかのやうである。然し女が金なき時、餘程堅固なたしなみを持つて居る人でない限り、男の同情と誘惑の區別がつかなくなつて、遂には取り返しのつかぬことに成り勝ちである。中には誘惑と知りつゝそれにかゝる者もあり、甚しきに至つては誘惑を強ゆる者さへあるが、これ等は皆金なくして陥る女性の墮落である。

三、金は卑しむべきものか

日本の社會に金錢を以つて、非常に卑しいものであるといふ風習が、一部にあるやうである。さういふ人達は、金に目がくれるとか、或は金に執着があるやうに人から見られることを、人間としてこの上もない、恥辱であると思つて居るらしい。こゝろいふ考へは、どういふところから來るのであるかといふに、一つの傳統に根ざして居るのであるが、その流れは昔の武士道を曲解したものである。武士の階級では、金と女は仇なりとして、それに迷ふことを最も警戒した餘り、遂に金を卑しむべきものであると、きめて居たやうである。さうして武士は喰はねど高楊子などゝ稱して、如何に金錢が、身に迫る必要を感じても、それがために節を狂げることが、武士の面目を失ふること、これに越したことはないとして、決して金錢に迷はなかつたのである。故に金錢を得ることを職業として居る商人などは町人と稱して、最も卑しい低い階級として取り扱つた。さうして、金が目的でない農業や工人を武士階級の次に置いて、



て、士農工商と區別をしたのである。それから進んで金錢のためにする行動を一切否定し、金錢を毛蟲のやうに忌み嫌つた形式をとつた。こゝろいふ習慣が、今日俸給生活者などに傳はつて、金錢を卑しむ風習をなして居るのである。併しその起源が、金錢に迷ふことを戒しめたので、金そのものを粗末に考へたのではなかつた。今で言へば、賄賂を取つて、節を賣つてはならぬとの戒しめに外ならないのである。それを一部では、自分が節操を守ることが強調せんがため、或は、殊更に金錢に恬淡なることを誇示せんがため、それとは言へず金錢を卑しむべきものなりと言ひ去るのである。自分が、それほど節操の固き人間であるならば、罪を金錢に藉して、惡しざまに言ふ必要はない筈。又、自分がそれほど金錢に潔白であるならば、金錢の御厄介にならずに生活したらよさうなものである。金錢を卑下したからとて、その人が金錢に恬淡であるとか、節操が固いとかいふことの證明にはならない。寧ろ、殊更にさういふことを言はなければならぬとい

ふことは、その人自身が、金錢に執着があり、金次第で動くのである自分自身の悪徳なることを陰蔽せんがために、他人を偽る言葉としか受取れないのである、われ／＼が、若しも金を卑しむべきものでありと呼號して居る人の行ひを検討して見るならば、それが驚くべき守銭奴であり、變節漢であることを發見することは、敢えて困難ではないであらう。寧ろ反對に、金を尊として大切にする人こそ、金を得る術、出す術を心得て居るから、金に恬淡であり節を守ることに極めて固いものである。

昔の武士や名工の中には、たとへ食ふに糧なく、着るに衣なくとも、殆ど絶対に金に目をくれず、己が天分に精進した人は珍らしくなかつた。それでこそ現代人の及びもつかぬ偉大な業績を擧げることが出来たのであらう。今日は人間行動の指導原理となるものは、凡て金といふことにならうとして居るから、政治も藝術も、金を度外視しては考へられないのは、寧ろ、末世の感なきを得ない。

四、金の遣ひ方で人間が分る

どんな悪い人間でも、また、どんな善い人間でも、人は生れながらにして、善惡兩様の心を持つて居る。言ふまでもなく人間の行ひは、この二つの心の、どれかの指圖に依るのであるが、さて人々は、どちらの命令に従ふのか、いよ／＼行ひに現はれて来るまでは、容易に分るものでない。如何に學問や技術が進歩しても、この人の心ばかりは、鏡にかけて見るように見透すことは極めて困難な仕事である。勿論人間は、表面誰でも菩薩のやうに装ふ。尤らしく

眞面目らしく善き人間らしく人目をつくらふ。けれども心は必ずしもそれに一致して居ると見ることは出来ない。

宗教は、人の性は善なりとて、どこまでも人間を善きものであるとして扱つて居る。法律は正しくこれに反對の見方をして、人の性は惡なりとして居るのではあるまいか。そこで、宗教家や法律家でないわれ／＼は、どういふ方で人の心を判斷したらよいか、これが人間歴史以來の難問題で、未だに「人は見かけによらぬもの」といふ悲しき句を残して匙を投げて居るかたちである。さうは言ふものゝ、一度われ／＼が人間の社會に立ち入るとき、交る人々は悉く善人のようである。即ちかであり和やかであり、旨いことを言ひ善き口を利く。それを眞に受けて、言はるゝが儘、爲さるゝが儘にして居たら、一體われ／＼はどうなるであらうか。間違ひはないであらうか。若しも人間が、各自爲すべき職分といふものがあつて、他人の言ふことを悉く信じて、その日を送つたならば、遂に自己破滅の悲運に陥らないとは何人が保障し得ようか。定からぬ人の世に、當にならぬは、凡そ人の心である。

蛇喰ふと聞いて恐ろし雉子の聲

あの佛のやうな人が、あんな悪い人であつたか………。これが、人を信ずる人達の、終世繰り込さらるゝ言葉である。さうかと言つてわれ／＼は、人を信ぜなかつたならば、何事をも爲し得ない。右するか、左するか、人の世の惱みとして、恐らくこれに越したものはあるまいと思はれる。

ではあるがわれ／＼は、「人は何によつて動くか、それは金錢である」といふことに思ひついた時、この惱みの大半は解決されるのである。解決の糸口が發見されたのである。試みに、何人かについて、この道理を究めて見るがよ



若しもその人が金銭に対する執着の強い人、言ひ換へれば金銭に汚れない人であるならば、如何にその人の言行が仁義に叶ひ、正しき人に見えても、金銭の利害に関する場面に差しかるといふと、遂に眞剣味を帯びて言行態度が一變して来る。世間話や、利害にかゝはらぬことには、さも興ゆかしい語らひを續けるが、金銭のことで一度自分に不利な話にでも移らうものなら、たつた今までの恵比壽顔が忽ち仁王様のやうに變つて「むき」になつて開き直るものがあるが、その時こそ、その人の値打ちが分るのである、心が見透し得るのである。男女を論ぜず、こうした型の人には、共通の傾向である。若き男女の戀愛、純情無垢なこの社會こそは、金銭の目安では測定出来ぬと人は思ふであらう。なぜなれば、戀愛は物質の受け渡しでなく精神の受け渡しだからである。然り精神の交換である限り戀愛は正しいのであるが、若しも男女の何れか一方に「物質獲得」といふ下心があつたならば、それは正しからざる偽はれたる戀愛であるのである。その時、

相手の人格を観るには、その人の、金銭に対する考へを見極めることが、最も確かな手段である。金銭の遣ひ方、出しつ振り、取り方、さういふ方面に注目して居て、若しも無駄遣ひ、吝嗇、慾張り、などの不純な點が発見されるなら、その人格の低く、卑しく又、善からぬ證據と知るべきである。

金銭に對する各自の考へは、それを押し進めて、一般物質にまで及ぼすことが出来る。金銭慾即ち物質慾である。更に利己本位の名譽慾、地位を得んとする慾望なども、廣い意味での物質慾と言へよう。古來支那の誠しめに「文臣錢を惜しみ、武臣名を惜しめば、その國亡ぶ」と言はれて居るのはこの謂ひである。そこで人の、この何れに執着があるかを見ても、その人の心を判斷することが出来る。若しも人が、こうした唯物主義者であつたならば、金銭には至つて恬淡のやうであつても、他の何れかの物質慾で、馬脚を現はす人もあらう。

俗に金遣ひが荒いと謂はれて、金銭を散らすことに極めて放漫な人がある。こういう人達でも、仔細に吟味して見ると、いろいろの型があつて、自分を利せんがために言はゞ資本を卸す考へで散らす人、或は又飲食遊興などで自身のためなら金に糸目をつけぬ人などは、金銭に放漫なやうであつても、その實極めて金に汚れない部類に屬するのである。さういふ人を鑑定するには、その人の「散らす」方面だけを見たのでは、容易に見分けがつかぬが、「得る」方面を見れば一日瞭然である。即ちさういふ人は金を得ることにかけては、恰も守錢奴のやうに厘毛を争ふのが通例だ。さうすると「あの位金に執着の強い人が、どうして遣ふ時には大雑把であらうか」と、不審に思はれる位である。殊に自分自身のこと、惜しげもなく無駄遣ひをする人は、得る時には全くの吝嗇で、所謂「けちん坊」といふ型である。ところが金銭を得るといふことは、嚴かな法律や社會の制限を潜らなければならぬが、遣ふ時にはこの

制限はないから、收支の締りがなくなつて、こういふ型の人は、いつも金を持つて居ないのが多い。つまり『貯へ』の生活観、理財観といふことが理解されないのである。われ／＼がたとへ遣はないでも、何かの用心のために、懐中に金を持つて居る時の氣強さ、それを分らないのである。

金を得るときの困難と苦心、それがつく／＼身に沁みて居なければ、金の有難味が分るものでない。さうして又、一人前の人間として、人中へ出て交際をして行く上には、到る處で金の必要が生じて来るが、その時に金を持つて居なかつたら、人間としての面目を保つことが出来ないで、非常に苦しい恥かしい思ひをすることがある。湯水の如く遣ひ果たした擧句の果てに、ハタと金の必要に迫つて、『あゝ、茲處に幾何の金があつたら。』と嘆き悲しんでも、もう、どうすることも出来ない苦しみを受ける人は、廣い世間に少くないと言へないであらう。金が人間の値打ちをきめるのはこゝである。義理人情は世渡りの義務だ。さうした時に散ずる金は、その税金である。金で物を言はずと人は悪しざまに言ふが、併し誠意といふものがなかつたら、金は出せぬ人間の社會である。なぜならば、『金は命の二代目』と言はれるほど、その身にとつては大切なものであるが、それをしも惜しまず出すべきことに出すところに、その人の眞心があるのである。いくら口先や態度で巧言令色を裝ふて居ても、いざ金の段になると、掌を返すやうに、辛くなり澁くなるのは、その本心に眞心のない何よりの證據である。

金の遣ひ方で、その人の値打ちと人格の分るといふのはこのことである。人の心と秋の空『あゝあゝの人の氣持ちはどうであらうか』と判断に悩んだ時には、眞正面から口先や顔形を見るのを暫く止めて、側面からその人の『金に對する態度』を観察すると、案外手易くその人の氣持ちが分つて、謎が解けることが多いのである。

敢えて黄金萬能主義の西洋諸國でなくても、人間萬事は金次第、金が人の値打ちをきめ、金は最後の人間行動を指導するものである。人は『金は敵』と悩むも無理はない、地獄の沙汰も金次第の譬の通り、人と交るにも金の切目が縁の切目と思つたら、大體間違ひはないのが世の習ひで、時勢の流れは滔々としてこの方向を辿つて居る。

五、金は國家の預もの

戦時日本に、今一番必要なものは何かと言へば、それは言ふまでもなく人と物である。この二つは車の兩輪、鳥の兩翼のやうに、どちらが缺けても、役に立たない。その中物といふのは、軍需品とか生活必需品とか言はれて居る所謂物資である。昔から腹が減つては戦さは出来ぬ、彈丸盡きては戦ふ術がないと言はれて居るやうに、戦地に戦ふ人達へは、兵糧と彈丸に不自由をさせてはならぬ。それを慥しらへる銃後國民も亦、食はずに働けない。こうして前線も銃後も、數知れぬ物資が、今も將來も、制限なく要るのである。故にわれらの最大關心は物である、物資である。物さへあれば、世界人類の、凡そ追隨を許さぬ大和魂といふものを、われ等は持ち合せて居るから、麻の如く亂れ、怒濤の如く荒れ狂ふ世界情勢の眞只中にわれ等は在つても、われ等又何をか憂へんやである。

こう時艱克服の根本方針が見極めがついたからには、全國民總かどりで物資を作り出さなければならぬ。これが今日本の、最も大切な國策であり、稱して重點主義と言はれて居る。即ち何をさし措いても生産擴充を主にしてやれとの謂ひである。

物資本位で進め……。この號令を受けた時、併しわれ等は、まだ何ものかに、後髪を牽かるゝやうな気がするのである。それは「金」だ。物資本位は話は分るが、さて金といふのは、この際どうなるのか……。と。眞剣に政府の號令を聽いて居ると、誰しもこの疑問が起るであらう。疑問があつては進めない、歩調が亂れる、出足が鈍るのは無理もないことである。併しそれは、自分自身が何のために金を持つかといふことを考へれば、譯もなく疑ひが解ける。即ち「金は物を買はんがために持つ」といふやうなことは子供にでも分る筈。さうして金自體は弾丸ともならなければ、胃の腑を充たし得るものでないことも分つて来る。して見れば人々の持つて居るその金は、取りも直さず物資の引換券である。すでに引換券であるとすれば、それさへあれば、望みの物資はどんなものでも手に遣入る譯である。併かも物資は、制限なく貯へることの出来ないものであるが、金は千年後の必要量までも貯へ得る、まことに重寶なものである。

物資は、それを作つたり使つたりする方面を見て居ると、その大切さが、まさしくと誰の目にも映つて来る。即ち一發の弾丸がなかつたために、折角遭遇した敵將を逃がさざるを得なかつた場合を想像するならば、弾丸即ち物資の大切さが如實に身に沁み込むやうに分るのである。そうでなくても今日われわれが、あらゆる品物の不足に悩むに至つて、物の執着から離れることが出来ないものである。ところで金は、さうした見る場面を變へて、作る者から使ふ者への物の動き、若しくはわれ等が何物かを買はんとする時を眺めて居ると、金の大切さがよく分るのである。例へば一魂の白金を購ふ金がなかつたために、今日にも戦地へ送らなければならぬ數千臺の飛行機が仕上がらなかつた時の苦惱の様を見るならば、金の大切なことが、つくづく分つて来るのである。斯る次第で、金と物とは見方によつて双



方とも貴重なもので、何れが缺けても相成らないのである。われわれは、金を見る場合にも、物を見る場合にも、その何れかに溺れて仕舞ふから、二つながら同様の重要性を持つて居ることが分りにくいのであるが、高い所から物と金の動きを同時に見て居る政府の目には、どちらに甲乙のないもの、言はゞ、楯の両面であることが知れるのである。物も大切にあり金も大切にあり、進んで、金を見ること物の如しといふ境地にまで、金を見る目が肥えて来れば、金といふものがよく分つて来て、一本の古釘を大切にするやうに一錢の金でも粗末にする氣になれないのである。

金錢をこういふ工合に考へられることは、どちらかと云へば金錢を私財即ち自分のものとしての見方であるが、これを更に國家のものであると考へた見方によると、もつと金錢の大切さが分つて来るのである。金は國家のものである……。この考へは遽かにわれわれには得られない。そればかりでない。一歩進めて、われわれの金は、自分のものであると

同時に國家のものである……といふ考へさへ分つて居て容易に納得が出来ぬ。われ／＼のからだは勿論自分のものである。萬金の山を以て迎えられも、生命の籠つたこのからだは、人に與へることは出来ない。けれども今日のやうな非常時に於ては萬金どころか、厘毛の對價を得ず無條件で國家に捧げなければならぬ。いよ／＼應召の赤紙を受取つて見ると、その氣になれて、これから先は自分のものでなく國家のものであるといふことが分るのである。金も、今日われ／＼が我物顔に持つて居ても、いよ／＼國家が必要の場合は税金などいふ形式で有るだけ國家に捧げねばならぬ。して見れば、われ／＼の金といふのは、自分のものであるやうで實はさうでなく國家のものである。だから、人間の値打ちを下げたまで慾張るものでないことも理解されるであらう。

昔建長の年間に、鎌倉幕府に仕へて居た青砥藤綱といふ人が、或夜從者を連れて滑川といふ河を涉つたところが、その從者が誤つて錢十文を河の中に墜した。藤綱は『それは惜しいことをした』と非常に残念がり、別に錢五十文を出して松明を買ひ、人を雇つて墜した錢を拾はせた。或人これを笑つて『五十文の錢を費つて十文の錢を拾ふとは、氣でも違つて居るのぢやないか』と言つた。これは或人でなくても、誰でもさう考へるのである。金を得んがために投ずる金は、言はゞ資本とも言ふべく、差引き利得がなくてはならぬ勘定であるに、藤綱のさうしたことは利得のないことを承知で金をかけるのだから常識では判断がつかぬ。然るにこれを傳へ聞いた藤綱、毅然として『自分の手を離れた五十文は、それからそれへと人手に渡つて天下に通用して居るから決して惜しいことはないが、墜した十文は若しこれを拾はざれば、天下の通寶を失ふことになるから惜しいのである』と言はれたさうである。こういう人の考へは金は自分のものでなく國家のもの、金は國家から預つて居るものであるといふことを、よく／＼納得の出來て

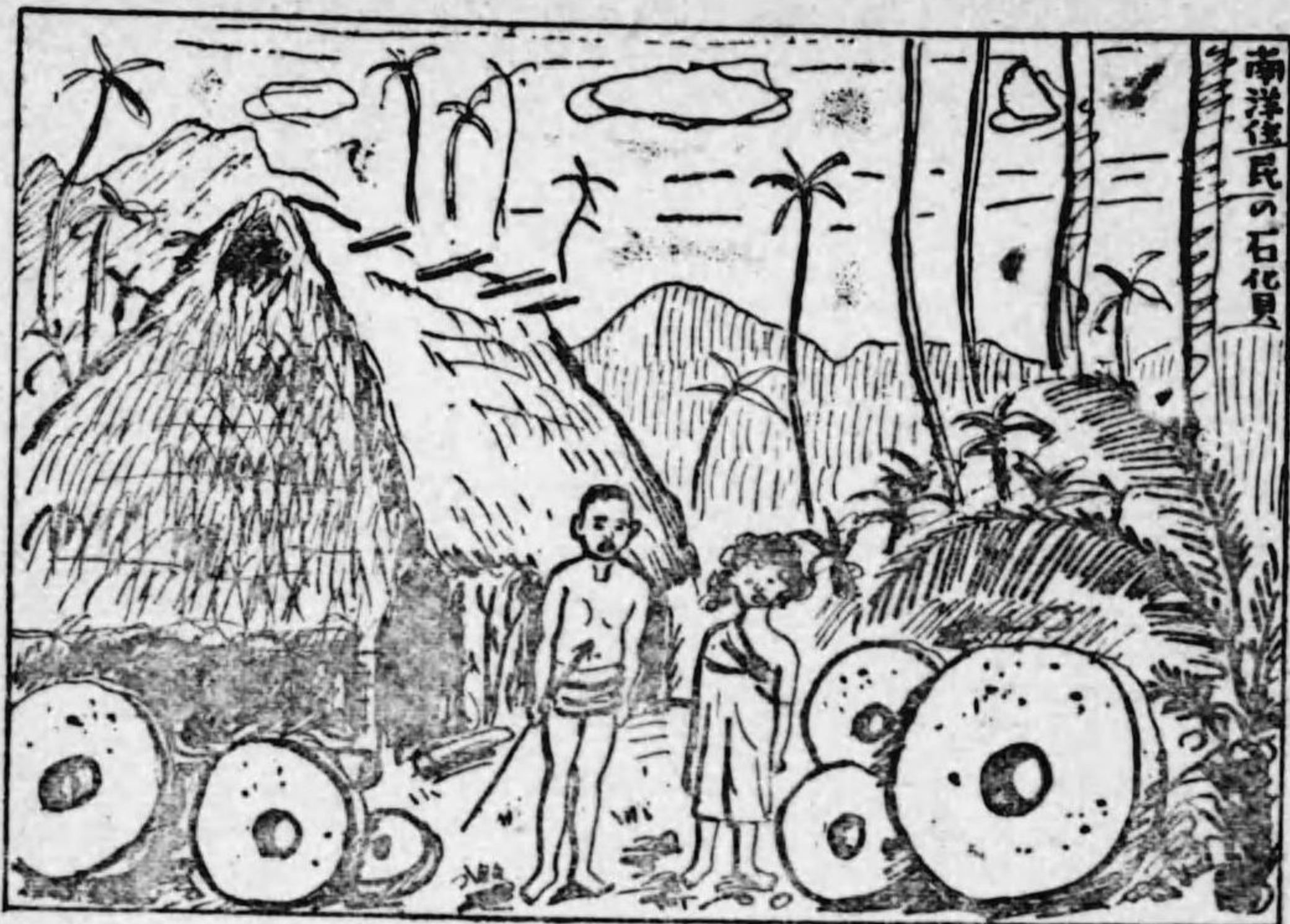
居る人で、日本國民として、まことに與ゆかしい限りであると言はなければならぬ。こういう考へであつてこそ、自分自身の金を損しても、國家の金を減らすまいとする氣になれるのである。

六 金と民族精神

金は自分のものでなく國家のもの……この言葉を下手に解釋すると、とんでもない間違が起る。即ち金は國家のものであるとの考へから、他人の持つて居る金を『あの人の持つて居る金は、あの人のものでなく、國家のものである』ときめて仕舞ふと、幾十年われ／＼が必死になつて排斥して來て居る共產主義、即ち『赤』になるのである。即ち金は物の引換券であるから、金が國家のものであるとの考へは當然に、凡ての物も國家のものであるといふことになり、私有財産といふものがなくなつて仕舞ふ。日本人の金に對する考へは、さうであつてはならぬ『金は國家からの預物』といふことにならねばならぬ。併しその考へも簡單に納得出来ることでない。何となれば、われ／＼の持つて居る金といふのは、われ／＼の生活のために、活動のために、物の引換券として事實國家から渡されたものでなく、われ／＼が働いて獲得したものであるからである。それを『預り物』といふ考へに到達するには、われ／＼の考への根本をなす日本精神といふものに遡つて見なければならぬ。

交通交易の便利な、今の世の中では、金さへあれば、日常の生活は勿論のこと、人間の望みとして叶はぬものは恐らくあるまい……と思はれる。従つて國の如何を問はず民族のいづれを論ぜず、金に對する『考へ』に相違のあらう

道理はないと大概の人は考へるであらう。けれども「考へ」といふのは精神であるから、若しも國によつて民族によつて、人間の精神が違つて居るものであるとすれば、この同様なるべき金に對する考へも相違して來なければならぬ。理窟である。お五個人同志でも、金を重要視することに相違はなくても、その程度は同様でないやうに、各人の考へが夫々違つて居るのである。況んや風俗習慣、歴史と傳統を異にする異民族間では、この間大なる相違のあることは想像に難からざるところである。そこで民族精神と言つても、民族の數だけある譯であるが、われ／＼日本國民の側からは、對等に見て居る歐米諸國をさして個人主義であるとして居る。個人主義といふのは身を律する自己を本位とするものであつて、家族や社會や國家は第二第三である。従つて金錢に對する考へも、自己保全の道具であるといふことが凡てである。さうしてその生活に於ても「自由」といふことが理想であるが、人間社會に絶對の自由といふとは望まれぬところから、個人同志の約束で一段高いところに「平等」といふ準繩を張つて置いて各自の自由を充たさうとすることによつて、本然の自由を獲得せんとするのである。結局可能な、合理化された自由であり個人主義である。そこで金錢に對しても、その準繩の代價は拂ふ。即ち戦時なれば公債も買ふ税金も拂ふ、蓋しさうせなければその人達の個人主義充足の手段たる共同社會が潰滅して、間もなく自分を不幸にするからである。共同社會といふのは國家である。祖國ともいふ。けれども親兄弟や友人路傍の人々に至つては、社會人には違ひはないが契約的共同的には微弱な社會であるから餘り重きを置かない。であるから、これ等の社會人が餓死するのを見ても、これを救ふとする態度にはなかく出ない。自分の親を自分の自動車の運轉手に雇傭して居るのは珍らしくない。夫婦は正に各自それ自身の幸福のために、相手の幸福のためでない。子供は人間の義務として育てはするが、それ以上の關係を續け



南洋住民の石化

この精神の瀰漫して居る歐米諸國間で、殊に今次大戦を轉機として、個人主義の政治形態たる民主主義に對抗して全體主義が唱へられて居る。然し全體主義といふのは、個人主義の政治形態が民主主義なるに對して倫理形態をとつたもので今に始まつたことではなく遠い何千年の昔から唱へられて居るので、決して民主主義に正反對の形態ではない。

人間の心は、生れながらにして自分のためのみを圖らうとする利己性と、他人と協調してゆかなければならぬといふ社會性の二つから成立つて居る。この社會性といふのは、利己性に正反對なものでなく、言ひ換へれば、自己といふものを全然無視して仕舞ふのでなく、利己性の欲する絶對の自由といふものは、人の世に到底あり得べからざることであつて、人は他人と提携し共同してこそ、可能的な自由も得られ幸福も得られるのである。即ち人も善かれ、我も善かれといふ人間の道徳性である。凡ての人間が、この社會性道徳性を強調

して、一つの社會例へば國家といふものが出來るといふと、普通個人の意志と稱せられる各自の利己性と全然別個な國家意志といふものが生れて來る。この國家意志によつて各人を指導し各人が行動するのを全體主義といふのである。ドイツやイタリアの全體主義國といふのは、その指導者であるヒットラーやムッソリニが、この國家意志に基いて民族を率ゐて居るのであるが、それは必ずしも民族各自の意志を代辯したものでない。これに反し個人主義若しくは民主主義といふのは、個人の意志の總和が國家意志であるから、その國家意志若しくは統治權者は、個人の意志の代辯者である。従つてこういふ國では、民族各自の意志を無視してその國の政治は出來ないのである。

今世界の民族精神は、この二つに別けられて居るやうであるが、併しよく考へて見ると、全體主義の國が各人の社會性ばかりで成立つて居り、個人主義の國は各人の利己性ばかりで働いて居るとはつきりきめて仕舞ふことは出來ない。全體主義の民族でも各自の利己性といふものを無視して居る譯でもなし、又、個人主義の國でも各自の社會性に期待をかけぬといふことはないで、只標榜する人間性例へば社會性なり利己性を、より強く固執するに過ぎない。

七、日本精神とはどういふものか

そこで日本民族の精神は、この二つの何れに屬するかといふに、嚴密に言へば、その何れにも屬してゐない。併し稍接近して居るものは個人主義にあらず全體主義であると言へようと思はれる。ところで全體主義の經濟觀はどうであるかといふに、あらゆる人間の經濟行動は、或目的を達成せんがための手段であると做して居るのである。即ち經

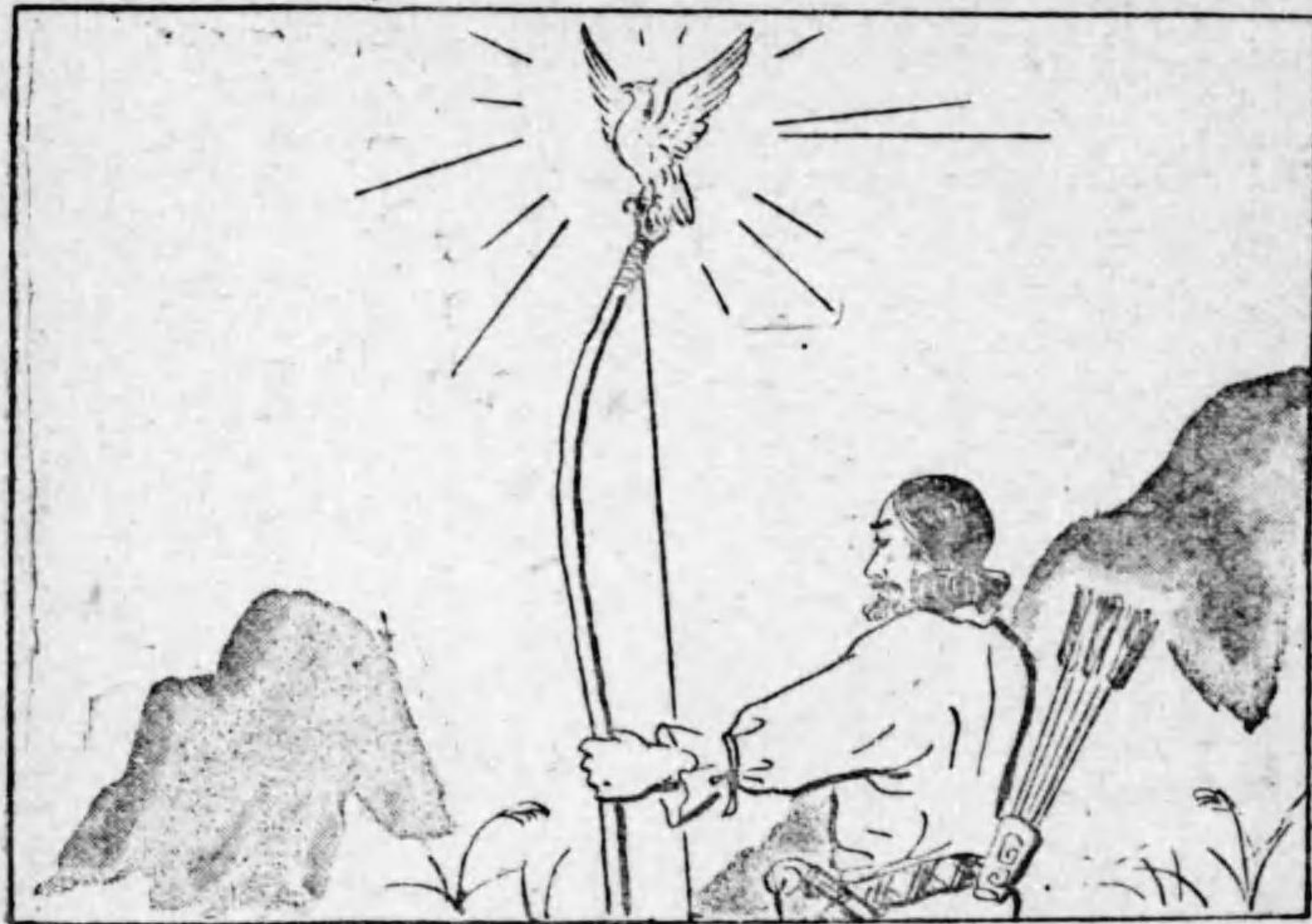
濟は社會の從屬的現象である。これを金錢に於て考ふれば、金は目的でなく手段である。従つて人間の經濟行動には金を得んとすることよりも、より高き何ものかの目的があつてなされるのである。各自の利己心を無視する譯ではないが、利己心そのものが社會的に從たるものであるから、國家意志によつてそれが制限を受けるのは當然であり、即ち統制といふことが、全體主義の經濟政策となつて來るのである。これに反し個人主義の經濟觀は各自の利己心といふことが人間經濟活動の主體であつて、金を得るといふこと自體が目的である。金さへあれば『あらゆること』が可能であると見て居る建前から、あらゆること』を以て目的とせない。目的は萬能の金を得ることにあると做して居るのである。

全體主義は國家が第一、個人が第二であり、個人主義は個人が第一で、國家が第二とするところに兩者の相違と特徴がある。日本精神は勿論國家第一には違ひないが、併し第二に個人を持つて來ないところに、全體主義と違つた點がある。試みにわれ／＼の内心に立ち入つて、國家第一の環境にその身を置いた場合を想像して見るならば、何人が第二に我身即ち個人を考ふるものがあらうか。このことは一度前線に出動を命ぜられたものは悉く皆體驗して居る。第一も國家、第二も國家であつて、個人若しくは利己などいふものは微塵も現れて來ない。これが日本精神だ。

然らばこういふわれ／＼の日本精神といふのは、どうして出來上つたのであるか。それは歴史であり傳統であり更に遡つてせんさくすれば、皇祖 天照皇大神の肇國の御精神である。併し三千年の年月を経て居る今日のわれ／＼に、しかとその道理を承知させることは、容易なことではない。なぜなれば、民族精神といふものは、萬世不易のものでない、發展があり變化あるを免れない。殊に、明治維新以來は、他國の精神が奔流のやうな勢ひでわれ／＼日本精神

を侵して居るので、複雑混淆の現代思想界に生きるわれ／＼の、傳統精神を茲に抽出して、これが日本精神であると
 言ふことは、事實に於て非常な困難なことである。例へば、音楽は民族精神の表徴であるときめたところで、われ
 々／＼は日本在來の音楽のみに趣味を持つかといふに決してさうではない。寧ろ若い人達は、西洋音楽にこそ魂を奪は
 れるのである。こういふ角度から人心を検討してゆくと、民族特有の精神があるかどうかと疑はざるを得ない。併し
 人間の習性といふのは、環境によつて作られるのであるから、民族毎に違つた傳統精神といふものがなければならな
 いのである。即ち右に掲げたやうに、われ／＼日本人は、非常の場合に際會しては、自分といふものを全く没却して
 徹頭徹尾國家本位で進む特性の如きはそれである。併し茲に國家本位の特性といふのは、どちらかと言へば西洋流の
 日本人觀で、われ／＼日本人の立場から説明するならば、それは一體觀とも言ふべきものである。そこで筆者は個人主
 義全體主義に對して、日本精神を一體主義と言ふのである。

われ／＼は勿論世界共通の人類であるからには、利己性も社會性も持ち合せて居る。併し別に一體性といふものを
 具有して居る。われ／＼が自分自身を深く省みるならば、親を無視して生きてはゆかれぬ、又わが身はわが子と別個
 の獨立的存在であるといふことも考へられぬ。自分の親に對して「子を育てるのは親の義務だ、我も妻を嫁り子を持
 つた場合、わが子は完全に育てる、こうして人間は順々に子を育て、ゆくゆくのだから、親に對する義務とか返禮といふ
 ものではない」といふやうな西洋の考へは、われ／＼日本人にはどうしても起らない。のみならず大恩ある親に、若し
 もそんな考へを起さうものなら天罰觀面だと信じてゐる。又夫婦にしても、個人主義の國では妻の、女特有の愛情を
 享樂せんがために、夫は妻を愛するのである。つまり夫は、妻に愛して貰はんがために妻を愛するのである。言ひ換



へれば、夫としては、妻を愛してやらなければ、妻は愛して
 くれぬから妻を愛してやるのである。さうして夫は、妻を愛
 する證據として、妻の物質慾を充分に充たしてやる。つまり
 愛情を買ふのである、代價を拂ふのである。それが西洋の夫
 婦觀の根本精神であり習慣となつて居るから、妻たらんとす
 る女は結婚前に、夫たるべき男の、こうした支拂能力をよく
 調べてかゝるのである。

この事實に對して「われ／＼の夫婦觀はどうであらうか」と
 と反問すれば、説明を待たずして「われ／＼は違ふ」と日本
 人である以上は誰でも答へるであらう。一體觀の傳統精神で
 ある日本人は、夫婦も亦固より一體觀であるから、愛情の取
 引では絶對ない。夫と妻は一つのものであるといふ觀念であ
 るから行住坐臥夫は妻を忘れず妻は夫を忘れない。その關係
 件といふものはない、愛は相互の自發的無條件の一體觀から
 生ずる精神であり行動であつて、西洋流に解釋の出來ぬ甘ん
 じて受ける犠牲的精神である。尙平たく言ふならば、「私のあ

なた、あなたの私』といふ卑俗な言葉が、日本の夫婦観を最もよく説明して居る。日本人が妻を考へ夫を思ふ時、そこに独立の個人といふものが全く消失して居る。さうして、只夫婦といふ一體あるのみである。これが日本精神の夫婦観であつて、建國の昔からわれ／＼の受け繼いで來て居る傳統精神である。これを歴史に徴するに、日本で最も古い『古事記』といふ書物には、人民の數を勘定するのに、夫婦を一人としてある。即ち夫婦を二人の集合體と見ないのである。一體であり一體であり一人であるとして、別々には取扱はれて居らぬ。これが傳統となつて三千年の今日まで續いて來て居るのであるから、個人主義の國では夫婦の財産は別個にきめられてあるが、わが日本は夫婦の財産については法律ではいろ／＼にきめられてあるが、一般社會の習慣では斷然『一體』とされてある。一體は共同でもなく況んや共産の制度ではない。共同や共産は互の持ち分といふことが頭から離れないのであり離縁の場合は各自の所屬に歸するのであるが、わが一體は、自分の持ち分といふ考へが、夫婦の間になく従つて離縁の場合などを想定してない。さうして夫婦關係に限りこの社會制が法律の規定よりも優位にあることは何人も熟知して居る通りである。

夫婦の場合、親子の場合に、こうしてわれ／＼が納得してゐるやうに、われ／＼の傳統固有の民族精神は一體觀であるが、これを押し擴めて國家を考へる時、そこには一天萬乘の大君を宗主に戴く一大家族の觀念に到達するのである。吾人愚かにして、この傳統の家族精神も、國家といふ龍大な家庭になつて來ると、各自の小なる家庭に於て考へられる精神のやうに如實には頭に浮ばないが、併し冷靜に、天皇陛下を中心に、日本の國家を考へるならば、一億同胞を家族とせられる大いなる家庭であるといふことが想像し得られるのである。さうして、天皇陛下に盡し奉ることとは、恐れ多い例へであるが、各自が親に盡すのと何等變ることのないものであることが首肯出來るのである。一軒

の家には主人がなくては立つて行かぬ。況んや一國の大家族には主君ましますとして、どうして立つて行かうか。われ／＼同胞赤子は、天皇陛下と一體である。大御心に愛えあらせ給はゞ、われ等民草如何にして晏如たり得ようか。

われ等一度、天皇陛下を思ひ奉つた時、個人主義や共産主義の利己性は勿論のこと、全體主義の社會性などを想ひ出す餘裕さへないのである。おゝわれ等の陛下……と途端に涙に溺れない者は一人としてあるまいと思はれる。こゝで注意すべきことは、われ／＼は近頃の流行語に慣れて、一にも二にも『われ等』と稱するが、天皇陛下を思ひ奉る時に限り『われ等』なる言葉は禁物である。なぜなれば、われ等なる言葉は必然的に同胞若しくは他人を聯想して、若しもその他人の許かに、自分の意識や態度と同一ならざるものが發見される時、自分の精神に弛みが生ずる危険があるからである。われ等の陛下と申し上げるより『自分の陛下』と思ひ奉つた時、自分の小心がはじめて、偉大なる御稜威に融合して仕舞ふのである。さうして、人が不忠であらうが、慾張りであらうが、或は狡猾であらうが、そんなことは、陛下に向ひ奉つて、己が小心から描かれた直線は、寸分の狂ひも來らず微動だもせぬ。さうして、善からぬ者が目についても、寧ろさういふ人達にはあはれみの情が起つて、我一人忠良の臣民たることが、無上の光榮と歡喜となつて、その胸に溢れるのである。

親に對する場合、『私達の親』といふ觀念を以てすれば、兄や弟の不孝を見て平等觀が起らざるを得ない。併し『私の親』といふ考へを以てすれば、兄や弟はどうあらうとも、自分一人が親がいとほしくてならない。即ち親の心に融け合つて居るのである理窟ではない。無條件だ。凡てを捨ける……、只それだけだ。西洋思想のやうに與へる時には

必ず何ものかを自分^{自分}が得る場合に限るといふやうな考へ方では、この日本人の心理は分らぬ。これを客観的に言ふならば、凡て感情を以て終始して居ると見られよう。西洋思想はこれに反して凡て理性の満足を得なければ何事もせぬ。理窟に合はなければ指一本動かさぬ。併し日本人の思想は理窟抜きに動く。これ西洋文明は理性の文明であり日本^{日本}の文明は感情の文明であると言はれて居る所以である。斯様にわれ等の傳統たる一體觀乃至は一體主義といふのは理窟打算、さういふ合理化を標準にしたものでなく、凡て無條件である特徴を持つて居るのである。これを日本精神といふのである。

八、日本精神は一體主義である

三千年の長い傳統を以て築き上げたわれ／＼日本人固有の精神は、一體觀にあることは、われ／＼の親子觀夫婦觀によく現はれて居ることは前述の通りである。併し一體觀は、親子夫婦の間にのみ局限されたものでなく、仰いで戴く御皇室に、この一體觀が透徹して、はじめてわれ／＼の一體觀が完成したものと云へるのである。然るに事實は、御皇室が餘りに崇高なるが故に、又、餘りに國家といふ大家族が範圍が廣いがために、究極の目標である一體觀に達し得ないかの憾みがあるのである。この及ばざることについては、われ／＼にその責めがある。

われ／＼の親子觀夫婦觀は、日本精神の現はれとして固より嘉すべきことであるが、動もすれば人は、この一體觀に溺れ切つて、親子以外夫婦以外に又別の社會のあることを忘れるのである。その結果は、自分の親はまことに大切に

天壤無窮ノ神勅
 豐葦原ノ千五百秋ノ瑞穂國ハ
 是吾子孫ノ玉
 タルベキ
 地ナリ
 宜シク
 爾皇孫
 就キテ
 治ラセ
 行クマセ
 寶祿ノ隆エマサンコト
 當ニ天壤ト窮リ無カルベシ



であるが、他人の親は眼中にない、わが子は實に可愛いが人の子は寧ろ憎い。わが夫が妻は、この世にたつた一人の愛すべき存在であるが、世間の男女は問題でない……といふことになり勝ちである。即ち一體觀に溺れると、こういう姿になるのである。併しわれ／＼は、千年斧を入れる深山に、或は萬年人影を見ざる孤島に、親子きり、夫婦きりの生活を今日の世界で出来るものでない。永久食はずに一家の中に閉ぢ籠つて居られるものでない。われ／＼は家にあつて親子の生活夫婦の生活をすると共に、外に出でゝはいろ／＼な世間の人達と共に、社會生活をせなければならぬ。複雑な今日の世の中は、こうしてわれ／＼に多面的な生活を餘義なくせしめて居る。さうして、この一つ一つの生活には、それ／＼特有の道徳とか規律といふものがあつて、それに従はなければ、その生活を續けてゆくことが出来ないようになつて居る。ところが、親子や夫婦の家族生活のみに溺れて、他に面倒な社會生活のあることに氣付かぬ者は、従つて又社會の

規律といふものを等閑にする傾向を多分に持つて居る。

家庭は睦じいかならぬが、兎角日本人は公徳心に缺けて居るとよく外國人が言ふのは、われ等の缺點を指摘して居るのである。社會には社會道徳が嚴存して居る。それを守らなければ社會人として立つてゆかれぬのであるが、この家族に精神を奪はれて、社會を見ることの出来ない者は、同時に社會を通じて見ることが便宜であるところの、國家といふより大なる家庭のあることにも、氣が付かないのである。従つて、親子の間夫婦の間に現はるゝ一體觀は誰でも承知するが、社會や國家への一體觀は容易に悟れないのである。親子だけ、夫婦だけの一體觀なら、それは二人づゝを一人にした個人主義で、社會國家に何の役にも立たない民主國以下の弱肉強食國になり終らぬとも限らぬ。試みに、無暗に他人の子供を憎む人がある。その人の、その人の子に對する態度を見ると、世間に例のないほどわが子を可愛がつて居る。又、矢鱈に世間の男や女を小馬鹿にする人がある。さういふ人の妻に對する態度、夫に對する態度を調べて見ると、これは又見悪いほど水も漏さぬ仲であることが多い。さういふ人達は、世の中に、自分達の社會しか社會といふものが、ないやうに心得えて居るかのやうだ。一體觀は、その儘御皇室まで擴大さるべき筈のものであるが、自分達の社會の囚になつて居るがために、そこまで生れつきの一體觀を働かすことが出来ないのである。併し、さういふ見悪い囚れたる人の姿を見ることを、他山の石として、自分自身が囚れて居ないか、果して完全な社會生活をして居るかといふことを反省して、大きく『我は大君を宗家と仰ぐ臣民である』といふ日本人だけの固有精神に立ち還らなければ、自分は日本人であると自負することが出来ないのである。

九、一體主義の金錢觀

個人主義者が金を持つ時、それをどう處分しようが隨意勝手であらう。誰に遠慮は要らぬ、國家の權力を以てしても、それに干渉することは出来ぬ。されど一體主義の日本ではさうはいかぬ。自分といふものには親がついて居る子供が居る、若しくは妻が居る、夫を持つ。こうして日本人は、原則として、純然たる獨身といふものはないことになつて居り進んで國家といふ大きな世帯に住んで居るのであるから、その中に居て、たとへ自分で働いた金にしても、その金は、それ等の家族員のために得たものであるといふ觀念があるから、右から左へ自由自在に處分することは許されぬ。若しさうであつたら、親はどうする、子供はどうなる、妻を如何にするか、更に國家はどうなるであらう。忽ちこれ等の社會は、破滅の外はないことになる。家族各個に私財といふものがないことが、日本人の家庭に於ける原則である。家族員の得たる収入は、一應家長の前に提出され、家族員の必要な費用は家長の責任としての考へから別個に支出されるのが習慣になつて居る。國家に對しては、この道理を大きくしたものに外ならないが、餘りに大なるがために、この金錢觀が有りの儘に分らぬまである。

されど、家族員の一人が、將來のために貯蓄をして居ても、一度家庭に非常な場合があつて、過大な金錢の必要に迫つた時には、その貯蓄を投げ出すことは親としても子としても當然であると考へて居ると等しく、國民の貯蓄を、國家の非常時に際して、悉く提出することを當然と考へない者があつたら、それは、日本人としての金を持つ術を知



らない者であると言はなければならぬ。
 われ／＼は、何ものかに融け合つて、一つの人格を作つて居るのであるから、金銭についても、自己を包含したこの何ものかの所有物と考へざるを得ぬ。夫婦の場合は、金は「われ／＼夫婦のため」に遣ふのである。國家に對しては、金は「われ／＼國家のために」遣ふのである。茲に一日を勞して得た若干の金があると假定する。それは「わが物」には違ひはないが、その考へを他國の思想と比較して見ると、そのわが物なる考への本質が違ふ。個人主義の國では、自分の持つて居る金に對しては、絶對の權限を揮ふ。例へ親であつても子であつても、乃至は妻にしても、經濟の理窟に合はぬことには厘毛と雖も出さぬ。然るにわれ／＼の持つて居る金は、親子夫婦に面しては、經濟の原則を無視して、條件なしで出す。それが處分に際し、我は少なく彼は多からう場合があつても、その不公平を甘んじて受ける特殊の金錢觀である。
 人文の進歩とは、より廣き社會に生活することであるから

われ／＼日本人の生活も、家族夫婦の最小限より、より廣き國家の圏内に擴大することが、文化國民の名を空しくせざるものであらうと思ふ。狭い社會に生きるも一生、廣い社會に生きるも一生であるが出來得ることなら廣い國家といふ社會に生きることが、生き甲斐もあり人間として至上の念願である。とは言ふものゝ、各自の受持つ職場により地位により身分により、凡ての國民に望まれぬやうに考へられる。併しそれは凡ての國民に出來得る相談である。それは、われ／＼の持つ金が、親子のものであり夫婦のものであるといふ考へを、もう一步進めてわれ／＼の持つ金は國家のものである……といふ考へに及んだ時、その殺那からわれ／＼は廣い國家生活をなし得るのである。

一〇. 金を活かして遣ふ人

金！ 金ばかりでない、金も引つくるめた一切の物、それを出し惜しむのを俗に吝嗇といふ。その吝嗇に、非常によく似て非なるものに、節儉といふのがある。このけじめが分つて居らぬといふと、金の遣ひ方を知つて居るものと言へない。この二つは、金や物を濫費する人、或は放漫な人から見れば、どちらも容易に出さうとはせぬから、一寸見分けがつかぬやうであるが、併しこれ等は全然本質が違ふ。

世間によくある。どうせ出さなければならぬものなら、潔く出せばよいものを、どうしてあの人はあゝ出し溢るのだらう……と、金や物を出すことを、恰もわが子に離れるやうに、或は身を切られるやうにつらいらしいのが、吝嗇の型である。



これに反して節儉といふのは、寄附などを集める場合「あのけちん坊がよく氣前よく出したものだ」と、人をして啞然たらしめる方をいふのである。言ふまでもなくこういふ人は金を出す術を知つて居るので、濫りに出さぬまである。さうして、出すべき時には、所謂金に綺麗であるといはれて居る人以上に、なんの未練がましいこともなく出して、斯くは人を驚かすのである。であるから、日頃出し過ぎるやうに見えるのは、實は出すべき時に皆さんがために、餘計な出費と思はるゝものへは、一切財布の口を締めて居るので、つまり後日出すべき時の貯へであることを、人は知らないのである。

人間の収入には限りがある。恵みたい施したいと思はぬ者はあるまいが、限りある金で、無限の慈善心を充たすことは出来得るものではない。そこで出すべき相手を選ぶことになる。一方自分自身に關する出費をなるべく節約して、こうした場合の用意をして置くといふことは、その日暮りや場當りの考へでは出来ぬ「計畫」を以て世に處する人にして

てはじめて成し得られることである。そこまで透徹せなくても、若しも人が、金がなかつたために、世間の「義理」を果たせなかつた時の辛さを想ひ出すならば、金は仇には遣へないといふことが、泌々分るであらう。

次ぎは金を得ることについての兩者の相違である。吝嗇といふのは、自分自身が、金そのものを、無意義に貯へ持つこと、言はゞ貯蓄欲といふことが凡てであつて、或用途を目標にして貯へるのでない。無暗に貯へたいのである。貯へることに趣味があるのであるとも言へる。だから、金を見れば忽ち貯蓄欲が起つて、只管それを得んことに努力する。さうして、それが徳義心に缺けて居る人であると、義理も人情も、或は法網まで辨へないことになるのである。西洋の諺に「金の執着は災のもと」(The love of money is the root of all evil) といふのがある。金の寄生蟲のやうな人間を誠しめて居るのである。

これと違つて節儉の方は、金といふものは悉く何かの用途が條件付けられてあるのであるが、制限のある収入で、無制限に遣ふといふことは出来ぬから遣ふ方を嚴重に選擇する。つまり金の功用を極度に發揮して、出来得る限り有効に遣ふといふことを信条として居る。さうして有効に遣ふべき機会が來れば、金は直ちにわが身を離るべきものであると考へて居るから、金そのものに對する執着といふものはない。従つて得るときにも、自分の良心を枉げてまで取らうとはせぬ。所謂正常な収入収益以上に金に目をくれぬ。また、いづれは出さなければならぬものを、さうまでして貯へる必要を認めないのである。

金と物、その出し入れにこの二た通りの型があるが、吝嗇とは金に溺れた姿であり、節儉とは金を活かして遣はうとする人、平たく言へば一錢の金を十錢に遣はんとする理財觀の持主のことである。

一一、理財の神黒田如水

昔豊臣秀吉の時代に、筑前福岡の城主に黒田官兵衛孝高といふ人があつた。家系は恭くも宇多天皇の後裔であつて現黒田侯爵家の祖先である。孝高は晩年隠居して如水と號し、古今稀に見らるゝ理財家であり、同時に經世家であつた。この人の儉約振りは、人を指導せんとする經世の念も手傳つて、寧ろ非常に極端なものであつた。當時の大名と言へば、今に於て想像も及ばぬ權勢を發揮したものであつたが、その身分にして、凡そ城中一物の支出と雖も、目を離さず臺所の末に至るまで指圖するのであつた。例へば、今日如何に貧しき物と雖も捨て、顧みざる調理場の廢物、即ち瓜の皮、野菜の切り端、魚の骨などに至るまで決して妄に捨てさせず、その榮養價を調べて、これ等の廢物に一々調味の工夫を凝して、下々の者が一汁にて食事する者への菜にさせられた。こゝろいふ按梅だから、城中は勿論のこと世間一般の人々は鄙吝極まる殿様だと陰口を利かぬものはなかつた。

こゝろいふ物に執着の強い吝しい人であつたが、不思議なことには、お上に金品を献納したり、下々の者に與へる時には、打つて變つた大々的特志家であり慈善家である。例へば如水の家來に扶持二百石を戴いて居る伊藤次郎兵衛といふ者があつた。一日、青い顔をして如水に見えたので如水は「爾の顔色悪し、宿病を抱くによるか」と問はれた。次郎兵衛「否」と答へれば、如水尙も懇ろに次郎兵衛の顔色を見入つて曰く「然らば、爾の瘦瘠は、平素膏粱に飽かざるの致す所、今我飯米を與へん」とて一書を認めて渡された。次郎兵衛恐るゝそれを披いて見れば、なんとそれ

は、五十石増賜の令狀である。次郎兵衛夢ではないかと、稍々暫く自分の正氣を疑つたが、矢張りそれはほんものであつたので、ワツとばかりにその場に泣き伏した。蓋し、如水の徳が太陽の如くに燦然と輝くので、次郎兵衛面をあげ得なかつたのであらう。

又或時、従者の一人が不幸に憊むと聞いた如水、即座に「銀十枚を取らせよ」と命じた。係りの勘定方驚くまいことか、一枚か二枚なら主君の命故直ぐに出しもしようが、十枚と言はれるに至つては黙つて出せない。そこで「殿三枚か五枚にて然るべしと愚考仕りますが」と申し上げた。如水これを機會に一同の者に諄々と説くのであつた。「我日頃儉約するのはこの事に備へんがためなり。而して思ふさま取らせたまが故なり。金も用ふべき時に用ひざれば瓦石に等し。貯へて詮なし。」と。

斯様にして如水は、世間並外れの過分の恵みをするといふのは、蓋し、今日で言へば十圓の入費のところへ十圓貰へば、それで當座の役には立つが、併しそれに困る人は、その事以外にも金に逼迫して居るのが一般だから、飽くまで人を救はんとするならば、十二分に間に合はしてやりたいとの、誠意の發露に外ならぬのであつたであらうと思はれるのである。

如水が、理財と經世と奉公の三つを行動に現はした美譚として、五百年後の今日に至るまで模範と仰がるゝことに日根野備中守に軍用金を用立てた一事がある。

時は太閤朝鮮征伐の頃である。派遣を命ぜられた光榮の日根野備中守、日頃の禮裁家にも似あはずその財極めて貧弱で仕度が出来ない。そこで三好新左衛門に頼んで如水に銀子借用を申入れた。兼ての吝嗇家、貸すかどうかと半信

半疑で回答を待つて居たら、如水感違ひでもしたのか、銀三百枚を惜し気もなく投げ出して「持つて行かれよ」と、實に氣持よく貸し與へた。備中守、如水のお蔭で首尾よく命を果して還つて來た。早速新左衛門同道で如水の許へお禮に出掛けた。如水心よく招じて、大役を果たされたことを慶び、盃を出せと小姓に申付けた。ところが又呼んで曰ふやう「盃ばかりではすげない、どこそこから贈つて參つた鯛がある筈。あの鯛を三枚に卸して、身のところは味噌付けにして置け。他日要用である。骨のところを炙にして釜處へ出せ」と申し付ける。二人の面前で「各々よく聞きやれ」と言はんばかりにこう聞かされては、兩人の内心涙だ隠かでない。なるほど如水といふ男は噂に違はずケチだわい。それにしても、折角有り合せの鯛の身を見せつけながら骨を喰へとは、我々小身者と侮つて、斯くは粗末に扱ふのであらうと、心に恨むが口へは出せない。さりとして態々持つて來たものをその儘置かずに歸る譯にも行かないので「止むを得ず」といふ恰好で居住ひを直し、改めて件の三百枚と種々の土産物を前に置いて御禮言上に及んだ。

如水、土産物は辱なく納めたが銀子は「それは献上したのである」との理由で受取らない。兩人いよく不審に思ひ「それはまた如何なる次第で」と聞き糺せば如水威儀を正して言ふ。その大意はこうである。

凡そ人に金を借りて、それを返すにはその金が役に立たなければ返す手段がない。故に貸す人も、その金が果して役に立つかどうかを吟味してかゝるのが普通である。然るに如水は、この銀子献上の意味で渡したので返して貰ふ意志がなかつたのであるから役立つかどうかは考へなかつたのである。だから受取らぬ。併し貴殿は私事のために遣はれたのでなくお上の御用に立てられただのであるから、それで御奉公が出來た譯である。如水もこれで蔭の御奉公が出來たと云ふものである。人間誰でも、こういうことがあるものであるから、如水は常に人々に儉約せよと申すのであ

る。儉約をせずに金銭を浪費して居たら、こういう時に役立たせようと思つても出來ない相談である。各方もよくこの點を分別せられよ。と諭すのであつた。兩人始めて如水の心底を識り己が心の及ばなかつたことに慄然として愧ぢ入り、大枚の銀子をその儘頂戴したかたちで、恐懼して歸つた。

兩人立ち去つてから如水は、近習の者を集めて「先刻味噌に漬けさせた鯛を皆の者に遣すから味はうがよい」と言つて、備中守を話題にとり、なんの時へもなく贅澤な生活をして居ると、いざといふ時に、他人に頭を下げて恥を曝らさなければならぬ。それだけではない、この場合如水が用立てをせなかつたなら、折角の手柄高名も出來ず、武人としての面目を失はなければならぬと、戒められたといふことである。

如水は又、衣服器物などの身の廻りのものや調度品は、用がなくなると近侍の者に下げるのであるが、それは決して只ではやらぬ必ず相當の代價を取る。人あつてその所以を糺した「是等の物之を臣等に賜ふも可ならずや、何ぞ代價を事とせんや」と。すると如水笑つて「是れ衣服什器なり、自ら買ひたると人より貰ひたるとを問はず、故なく之を人に與ふれば、受者は誇り、不受者は之を慥むべし、人の長たるもの之を執らず」と曰はれたさうであるが、實に經世の至言である。

更に傳へられる如水の言行として、戦時下われ／＼現國民の強いて龜鑑とすべきものがある。即ち如水は「人間は誰でも分以下下の生活をして、冗費を省き有事の備へをして置かねばならぬ。それがためには、衣服ばかりでなく住宅も、立派なものを造る必要はない。馬も、強健で戰場を馳騁し得るものならそれで結構、高價な衣装で飾る必要はない」と常に戒しめて、自身先づそれを實行して居られたといふことである。



この「分以下の生活」といふのが重点で、考へて見れば、われ／＼は今日まで「分相應の生活」といふことを認められ「分不相應の生活」を戒しめられて来たのである。然るに如水が有事の際に備へんがために分相應以下であれと言つたことが、古今の名言であることが、われ／＼が今事變に直面して初めて理解されるのである。即ち今日の物資缺乏に際して鶏卵がない牛肉がない、純毛がない純綿が欲しいと愚痴を言ふが、それを分相應として日頃さういふ生活に慣れて居るから、苦惱を訴へるので、若しも平時、分以下で、粗衣粗食に慣れて居れば、決して今日の物資缺乏をこぼすことはないのである。今日都會の人は、地方農村は景氣はよいなどいふが、これは何も農家に限つて収入が殖えた譯ではない、収入の殖えたのは寧ろ都會である。然し農家自體から見ると、事變前より幾分収入が殖えて居る。それは農産物の値上りからである。それに比べて都會では、農産物の値上りに幾倍する収入増を見て居るのであるが、農家では幾分の収入増に對

して日頃の生活の水準を堅く守つて居るから、幾分の収入増だけがその儘全體の収入となつて、懐中に残るかたちになつて居るから、農家は景氣がよいと都會人がいふのである。然るに都會人は日頃の生活の水準が高い上に戦時増收で尙更その水準を高めやうとするから、物資の缺乏を苦にするのである。農家では鶏卵や牛肉のないのはなんの苦にもならない。純毛などは生れてから着たことのない者は少くなくないから、そんなものゝ缺乏には一向關心を持たぬ。昔塙保己一といふ盲目の學者が、夜中大勢の學徒を集めて講義をして居られたところが、吹き込んだ風のために蠟燭の火が消えたので、學徒は「先生火が消えましたから、講義を一寸待つて下さい」と言つたら保己一は、「さても目明きは不自由なものだ」と言はれたさうである。これと今日の物資缺乏とは話の筋が違ふが、道理は同じである。日頃贅澤をして居る者には今日の物資缺乏はまことに不自由だが、農山漁村のやうな質素な生活をして居る者には、何の不自由もないのである。持つ國英米主國の惱みはこゝにある。優秀民族だなど、日頃誇つて居ても、その生活物資は無盡藏に得られるものでない、長期戦にさしかゝれば、遂には野蠻未開の民族にも劣る生活に甘んじて戦はねばならぬが、彼等にはそれが出来ぬ。

或賢明な金貸しがこゝにいふ話をしたことがある『私は人に金を貸す時、その人の商賣に目をつけぬ、それよりもその人の私生活が質素であれば、たとへ商賣の方はどうかと見られても思ひ切つて貸す。商賣といふものは、いつまでも旨く行くものでない、よい時ばかりでない、それで、若しも商賣が左前になつた時、その人の生活の水準が低くければ、その左前を切り抜けることが出来るが、贅澤をして居る人にはそれが出来ぬ、つまり弾力性がない』云々。

利功な識見である。國家が戦ふ場合にも、持久戦に堪へられるかどうかは一つにその國民の生活程度によつてきま

る。人間は質素から贅澤には譯もなく轉換し得られるが、贅澤から質素に程度を下げることは中々困難なものである。然るに戦時には、その質素から、又一段と生活を切り詰めて不自由を忍ばなければならぬ。さうして、この不自由を忍ぶことが出来ぬとなれば、戦時國民としての責任を果たすことが出来ないことになる。爾來日本が戦争に強いのは、「いざとなれば日本人は、米と鹽だけで何十年でも戦ひ抜き得られるからである」と、われ／＼自身が自負して居た。事實もたゞの通りで、これがわれ／＼の誇りであり國家としての強味である。即ち生活の水準の低いといふことは、今それが役立つて来たのである。今日商賣が旨く行かないとか、喰べて行かれぬとかいふ人があるが、若しも米と鹽で我慢すれば、一億國民一人と雖も困らぬ。祖國興亡の關頭に立つ英米佛國民と雖も、彼等はパンと水だけでは戦争はせぬ。といふよりも、さういふ原始生活では、最早彼等の健康を保つことが出来ないのである。

人間は、兎も高度の生活を望み、その時代々々の文化の恩恵に浴したいと冀ふのは人情であるかも知れぬ。併しその慾望に制限を加へて、常に分相應以下の生活に甘んじて居ないと、一朝有事の際に役に立たないと戒しめた如水の識見は、今にわれ／＼の指導原理として、申分のないものである。

一二、聖將乃木將軍を憶ふ

今様黒田如水として、われ／＼の是非學ばなければならぬ人に、乃木將軍がある。乃木將軍と言へば非常に質素な生活をした人で、浪札節などに話らせると、將軍は決して絹物などを用ひられず、常に木綿の着物を着て居られたや

うに言ふ。それは將軍らしい行ひであると想像して、態々作つた話で、事實の將軍は決して斯る世間並の理財觀を持たれた人でない。長年將軍に附いて居た人の話によると、なるほど將軍の一生は簡易生活の連続で、よく／＼必要であると思はれるものでなければ買はれなかつたが、併し只質素であつたといふのでない、物の功用を極度に活用された人である。従つて着物を一枚作られるにしても、その着物が、是非自分になくはならぬものであるかどうかを考へられた上、いよく／＼買はれる時には、決して安い木綿ものなどを買はれない。それは人から見れば寧ろ贅澤でないかと見られるやうな立派なものを常に買はれた。さうして色合や柄なども、年を取つても着られるやうに考へて選定されたが、つまり將軍の考へは、究極の經濟といふことを主にして物を調達せられたのである。言ひ換へれば一圓のものを買つて一と月しか使へないものよりも、三圓のものを買へば一年使へるといふ物の功用に立脚して居られたのである。今でも乃木神社の隣りにある將軍の住まはれた家なども、見掛けは甚だ粗末なやうであるが、あれでなか／＼金のかゝつた家で、用材と言ひ大工の仕事の仕口と言ひ、申分のないものである。殊に一般の人の等閑に附する基礎工事の如きは思ひ切つて金をかけてあるので、相當強い地震などに遭つても、地上の建物はびくともせぬものであると、今でもその道の人が感心して居る位である。従つて三年や五年で歪みが來たり隙きが出来たり、或は戸障子の縮まらぬやうな不完全なものでないので、後日修繕費のかゝらぬやうに、最初に十分の注意を拂つてあるのである。だから決して贅澤でなく濫りに買はれない點から見れば寧ろ質素過ぎる位である。只いよく／＼買ふ時には思ひ切つてよいものを買はれることは、所謂徳用な買ひ方と評すべきであらう。こうして將軍は、いつも上物ばかり買はれるが、それは決して贅澤でないといふ一見才盾した批評は、他の場合將軍が如何に物を經濟的に使はれたかといふこ

とによつて解けるのである。例へば將軍は酒を好まれた。それで家に居られる時にはいつも労働者などの飲む「どぶ六」を愛用されたのである。言ふまでもなく單に酒を親しむ點から言へば、どぶ六は決して旨いものでない。けれどもどぶ六といふのは、食事の代用になり肴は要らず、それで酒であるから俗に三徳と言はれる徳用この上ない酒である。銘酒などは、酒そのものとしては實に芳醇そのものであるが、つい飲み過ぎることもある。又それには高價な肴も要る。終つてから粗食では飽き足らぬ。結局非常に高價なものになるところから、常に二菜以上を食膳に並べぬ將軍の私生活に合はぬところから、この徳用な酒を選ばれて居た。だから將軍の消費生活は、徹頭徹尾「經濟」の二字に盡きるのであり、凡そ算盤から割り出して居られたのである。その經濟も、必ずしも人々の考へて居るやうな自分本位のものでない。將軍はこの間、殆ど自他の區別はない。例へば、自分の古着などを下々の者に與へられる時にも、綻を繕ひ皺を延ばし、汚れたものは洗ひ張りをして仕立て直し、これなら五年十年使用に堪えろといふ目安のついたものでなければ、決して人にやられなかつた。將軍の徳はこうして、苟も接する人を感化せずには置かなかつた。

又旅行などなされて宿屋に泊られた時には、最初の食膳に供へた割箸を綺麗に洗つて置かれて、その宿屋を立ち去るまで、その箸一本で間に合はされ、決して食膳毎に附いて來る新しい箸を使はらなかつた。これは甚だ些細なことのやうであるが、この一事が、將軍の經濟生活の凡てを説明するものであり、同時に、現代人が渡る經濟界の羅針盤であると言へようと思ふ。

金を拂つて泊つた宿屋、出されたものは悉く自分の自由處分に屬すると思ふのは常識だ。といふよりも寧ろ當然

の權利だ。殊に割箸の如き事は小さいが考へて見れば、宿屋の方ではそれさへも代價に見積つて居り、お客の方ではそれを拂つて貰ひ取つて居るのである。それを使はなければ得るものは宿屋ばかりで、自分はなんの益するところはない。それよりも三度々新しいものを使つた方が、氣持がよいといふものである。なんの意義あつて割箸の末まで宿屋のためを圖るか……、と人は思ふ。けれどもそれは自分本位の經濟觀といふものである。

われ／＼は自分自身の私生活と同時に、社會生活國家生活をなして居るのである。即ち社會はどうでもよい、國家は問題でないといふことは、實際に於て許されない。そこで、買ひ取つた一本の割箸を使はぬことは、私生活では意義をなさないかも知れぬが、それは國家社會の上から見るならば、不必要な消費は、それだけ國家社會の資源を無意義に消耗することになるのである。買ひ取つた割箸をその儘返して、備かるものは宿屋ばかりで、自分は損すると思ふのは、それは單なる私生活のみ囚はれて居る個人主義の考へで、社會人であり國家人であるといふことは出來ない。従つて極端に言ふならば、國民でないことになる。個人主義者の取引觀は、苟も金を拂ふ以上は、それに対する何物かを得らなければならぬことを唯一の條件として居る。國家人はさういふ場合、これは原則といふものであつて、それに間違ひはないが、併し苟も國民であるからには、われ／＼の私生活は國家社會の洗禮を受けたものでなくてはならぬとして居る。さうした時、自分の取引觀から理窟に合はないことがあつても、國家社會の上から合理的であればそれに従ふことになるのである。「われ／＼は國民である」といふ自負心が強よければ、自分の私生活乃至私欲といふものは、まことに渺たる小事に過ぎないことは、少しく考へれば誰にでも分ることである。一人の人が不當に儲けたところで、それが國家社會に役立てば、小さな利得などは問題でない。これが國家人の考へだ。それをど



までも私慾に執着して居ると、出された料理の中で自分が好きでないもの、或は飽食して居る場合でも、喰はなければ損だとして、一々喰ひ散らして、再び役に立たぬようにして返すことになる。それでその人の腹の蟲は納まるであらうが、國家はそれだけ損をすることになる。厭なものなら箸を附けずに置けば、それは他で用を勤めるのであるが、喰ひ散らされては、二度の用を勤めるに詮なきことになる。さういふ人は宿屋ばかりでない、いろ／＼の時に外食する場合に、自分の必要量も考へずに漫然と料理や辨當などを注文し買ひ取つて、それを碌々喰べもせず、さりとて二度の用をなさないやうにして捨て、顧みないのが多いやうである。然しさうした私生活に終始する個人主義者でも國民である以上は、國家が必要である時には、さういふ生活をさせて置かない。現に日本の國家は、國民の一物一粒と雖も無駄にさせない必要に迫つて居るのであるから、この頃どここの飲食店へ行つても、「注文したものは全部召し上つて下さい。要らないものは注

文せずに置いて下さい」と書いて張紙をしてある。これが國家が、國民に自分本位の生活をしてはならぬと呼び掛けて居る何よりの證據である。

將軍の消費生活はこうした考へで、宿屋に泊つて外出される時に、辨當の握り飯を包ませた竹の皮は、その儘持つて歸つて、「明日もそれに包んで貰ひたい」と差し出されるのであつた。さういふ譯であるから、將軍の廢物利用は、微に入り細を穿つて、一片の反古と雖も有効に利用された。例へば、他所から小包郵便などが來ると、丁寧に紐を解き包紙を延ばし、或は箱の釘などを一本々々抜き取つて、後日の用に備へて置かれた。役所で報告書などを作られる時にも、それを綴るのに新しい紙を裂いて紙摺を儲らへるやうなことはせられず、必ず捨てるべき反古を利用された。又那須石林に居らるゝ頃、東京から毎日送つて來る新聞の帯封を丹念に貯めて置いて、それで「はたき」を拾數本も作つて置かれたといふことである。

一片の反古、一本の古釘、それが無駄に捨てられ行くことが、日本の國力が、日本の資財が、ちり／＼と減つて行くやうに考へられる時、今日のわれ等が、ほんとうの日本人であるのである。

さういふ經濟家であつた將軍は、それで金には至つて恬淡で、人に與へる時には、恰も施主のやうに奥床しい人であつた。

將軍は「善い事」をすることを、恰も趣味のやうに、自分自身が非常に喜ばれた。例へば、東京に居られる頃は、四谷鮫ヶ橋の細民街を訪ねられて、無名の一老人として、幾度となく金を寄附された。寒いにつけ暑いにつけ、貧しい人達は困つて居るだらうと思はれて、餘り豊かでもない將軍の財布の中から幾分を割いては、この慈善をせられた

のである。餘り度々妙な老人が来るので町の役員が調べたらそれが乃木將軍であることが分つて恐縮の餘り、將軍の徳を細民に知らせたいと申し出でたが將軍は「決して自分の名を出さずに置いて貰ひたい」と言はれるので、遂に將軍の名がこの街には分らずに終つたといふことである。斯様に金に執着のない將軍であつたが、施す金が有効に使はれることに細心の注意を拂はれた。一日或退役の將校が將軍を訪ねて、軍事に關する書物を出版したいから金を貸して貰ひたいと頼み込んだ。この書物といふのは、その頃五百圓もあれば出せるものであつたさうだ。ところが將軍はこの無心を言下に快諾され「よろしいやう」と言はれて出された金が千圓であつた。さうして更に念を押して「これは只やるのではない貸すのであるぞ」と言はれたさうである。蓋し將軍の意中は、兎角事業といふものは意外の金が必要のものである。従つて眞にそれを成し遂げようと思へば豫算以上の金を持つてかゝらねばならぬ。さうでない中途で資金が足りないがために挫折することが往々あるものであるとの誠意から、倍額の金を渡されたのである。尙貰らつたものであると思へば、當人の心に緩みが生ずるから、勵ます意味に於て「貸すのである」と言はれたので將軍の内心は決して返金を豫期して居られたのではない、その證據に、決して返さぬからとて催促はされなかつた。世上かうして場合には、一種の掛け引きがそこに行はれて、申出でより少く出すのが通例のやうである。然るに將軍は、反對に多く渡されたといふのは、こういふ心からの親切であつたのである。同じ金でも、こうした徳の籠つた金は、渡されたものに取つては、有り難味が違はないでは置かぬ。必ず目的を果して、立派に御恩返しが出来得るものであるが、掛け引きされたり中途半端であつては、それが出来ない場合も少くないのである。

一面非常に贅澤なやうで、その實非常に質素であつた將軍の私生活は、一度將軍の家を訪ねたものは、誰でも氣付

くところであつたといふ。言ふまでもなく、位人臣を極めた將軍であるから、世人は、敢えて認ふ意味ではなく、眞に敬意を表する氣持ちで、所々方々から贈物がある。端的に言ふと、その贈物だけで私生活は十分であるくらゐである。さうして、それ等を一々納められ消費されたからとて、品格が下がる譯でもなし分に不相應といふこともない。併し將軍は、常に分以下の生活に甘んずることを信條として居られたから、世間の人から見ても「こんな粗末なもの」と思はれるものでなくては受取られない。

或時、長年話になつた部下の者が、長崎カステラの土産を土産に將軍を訪ねた。將軍はそれを押し載して受取られ、そして床の間に供へて恭しく拜まれた。折角の贈物を受取つて貰へたので、部下の者は、こみ上げる涙を抑へることが出来ないほど嬉しく思つた。すると將軍は、再びその贈物を部下の前へ出して「そなたの好意は十二分に貰ひ受けた。併しこの品物は、分に過ぎたものであるからお返しする。他にもつと不效に使はれたがよからう」と言はれたさうである。これは今現存して居る部下であつた人の思ひ出話であるが、こういふ實例は枚擧に遑のないほどあるので、所謂菓子折に屬するこの種の贈物でさへこうであつたから、書畫骨董や器物の高價品は絶對受取られないことにきまつて居たといふ。だから、將軍家の室内は、いつも殺風景で、これはと見らるゝ飾り物や調度品は、一つとして見當らなかつた。

一三、乃木將軍を學ぶことが出来るか

無骨無粹な將軍の私生活、併かも一物と雖も蔑にせられなかつた、言はず分その點に隙のなかつた理財観は、一體どこから出たのであらうか。われ／＼の以て學ぶことが出来ないものであらうか——、といふに、決してさうではない。われ／＼の考へ即ち心の置き所を變へれば出来ることであると思はれる。

周知の如く將軍は、遠く西南の役から日清日露の兩戦役に偉勳を樹てられ、適れ不世出の武將として、人氣の絶頂に祭られた人である。併し將軍は、この人氣を嬉しいとは思はれず。幾萬の同胞を戦場に遣して、なんの顔あつて父兄に見えんかといふ氣持ちで、世の歡迎に目をくれず、黙々として過ごされた將軍の一生は、實に苦勞の連続であつた。さうしてこの思ひ極まつて、自己を解決された方途は、明治大帝の御後を追つて逝かれたことである。

この將軍の生涯をわれ／＼の考へと比較するに、われ／＼は餘りに自己といふものに囚はれ過ぎて居ることが明瞭に看取出来るのである。人は、全然自分を無視することは出来ない。併し、その自分は、親が／＼の子供のやうに、國家といふ親を離れては生きて行かれぬ。親と共に暮す、親と共に行く。こうして行住坐臥、親に後髪を牽かれながら、行き且つ動いてゐるのが、子供であり同時に國民としてのわれ／＼であり又こゝに謂ふ自分である。この自分が國家生活をなす自分である。夢寐の間も忘れることの出来ない親、否、無意識の間にも自分は親に離れて居らない子供の生活は、稱して『親子生活』と言ひ得よう。この時子供は、必ずしも自己を捨てたのではないが、親子生活の意識の方がより強いのである。われ／＼は必ずしも自己を捨てることは出来ないが、國家を思ふ念慮の強いとき、その自分の行動を國家生活といふ。これを現在の言葉では『公益優先』と言ふのである。自分と國家を比較したときは、この考へは起らぬ。自分が國家の懐に這入つて居るときにのみ起るのである。けれどもその國家といふのは、西洋流



聖將殉死の跡

の國家でない日本流の國家の謂ひである。日本流とは、親即ちわが家といふ觀念から展した天皇陛下即ち國家といふ考へである。

われ等の懐中、われ等の身の廻り、わが家の一物と雖もこれ親のものでありといふことに、われ等は聊かの疑心を抱かれぬ。その氣持ちに、聊かの異心を混へず迷はず一直線に、日本國家といふ大世帯を治す天皇陛下に向ける時、われ等の心は、最早自己を離れた純粹の國民に變るのである。

この道理をもう少し正確に述べるならば、われ等の親、即ち僕等の親戚達の親といふ考へは、正しい子としての心になる道筋でない。即ちわれ等と考へるとき、そこに異心を挟む餘地を作ることになる。なぜならわれ等即ち僕等といふ考へは人間の弱點として、兄弟を聯想し比較する傾向を伴つて居るがため、それに引きづられて、眞の親の姿が目映らぬ。ほんとうの親を見るには、僕等ではなく『僕の親』といふ考へで直視せなければならぬ。『僕』といふ考へは自分一人を意味

し兄弟を比較する餘裕を持たぬ。従つてその場合、兄弟姉妹がどうあらうとも、さういふことで自分の親に對する考へは微動だもせぬ。それを又、その健實心も混へず大きく擧げて、ほんとうに天皇陛下の御姿を拜し奉らうと思ふなら、『われ等の陛下』は迷ひ易い、『我が大君』といふ純粹な國民精神で拜し奉るとき、紛れもないほんとうの陛下の御姿が目に見えるのである。われ等といふ考へを透して拜し奉る御姿は、丁度、曇天に太陽を拜むやうに、漠然たる姿しか映らない。さうしてこの場合の『われ等』といふ考へは、所謂西洋思想である。然るに日本思想といふのは、この考へから同僚といふ觀念を差し引いた純粹の『われ』といふ考へである。これは又、自分一人といふ考へでもなく、嚴密には自我を超越した考へ、即ち上御一人の大御心に融け合ふ姿である。これが日本精神である。他人のことが目に映り心に關する間は、まだ／＼ほんとうの日本精神になつて居ない。

人々が眞劍に神佛を拜む時、或は、親に對して心から敬虔の念を捧げる時、その時の心理は、自分もなければ人もない、只目指すものは神佛若しく親以外に何ものもない。これが起自我である。この時強いて自分の存在を探索するならば、極めて小さい自分といふものが、微かにそこにあることに氣付くであらう。さうして他人の存在を認めて『われ等』なるものは、どうしても見出すことは出来ない。これが日本精神である。ゆへに、われ等といふ言葉は、天皇陛下に對し奉る時の言葉でない。われ／＼が『われ等』といふ言葉を使ふのは、同胞に呼び掛くる時だけに限るのである。一種の信仰である。信仰心は培養せなければならぬ。一億同胞悉くが具有して居る信仰即ちわれ等の傳統日本精神と雖もそれを培養せなければ發顯の機會を失ふ。毎日幾度か、皇室を拜し大御心を憶ひ奉つて、たとへ殺那の間でも、自分といふものを無くして、この信仰の傳統を培ふべきである。これを毎日繰り返すことに依つて、遂

には、四六時中大御心から離れることの出来ない自分になるのである。われ／＼が、今までの自分より、この考へに心の置きどころを變へた時、聖將乃木將軍を學ぶことが出来るのである。

一四、ところで今の世相はどうか

人間働くには、そこに何か慰安がなくてはならぬ……。これが非常下に於ける日本の政治の有り難き理念である。かかるが故に、所謂娛樂機關といふものが、殆ど事變前に變らぬ位に、あらゆる社會に現存して居る。されど、政治の有り難い思召しで、社會にあるからとて、當然の權利のやうに、或は娛樂にのみ没頭し、或は娛樂を求めんがために働くといふのでは、政府の主旨にも悖り國民としても奉公の全きを盡して居るものとは言へないであらう。この道理を平たく言へば、政治は、働かさんがために、非常時下にどうかと思はれる即存の娛樂機關をも認めて居るのである。それを逆に取つて、娛樂せんがために働くことあつては、正しく本末顛倒の沙汰である。慰安のための娛樂であるが、さてその娛樂が果して慰安となつて、働くものゝ身心を、恰も休息が疲勞の恢復となるやうに、なるものであるかどうかと考へて見なければならぬ。これについて、東京の淺草六區に映る情景を検討して見よう。

こゝに娛樂機關といふのは所謂民衆娛樂と稱せられる映畫演劇、運動競技、遊興飲食の一切を引つくるめたものを謂ふのであるが、それが大衆向きで、人の集りが多いほど、その弊害が甚しいことを認めてかゝるのである。すると

こういふ機關の多い都市に着眼せざるを得ないが、大都會などで「盛り場」と言はれて居るのが本論の對象だ。

東京には淺草銀座澁谷などの盛り場が多いが、その代表的なものとしては、東京名物一つに數へられて居る淺草六區だ。はじめ、東京へ来た人は、淺草を見物して行かねば土産話にならぬ位有名だ。そうして街に働く職人徒弟をはじめ、青年男女の學生々徒に至るまで、月に幾日かの休みをこゝへ浸つて慰安を求めようとする。さういふ考へと、さういふところのあるのは決して悪くはない、……と誰しも思ふ。然しこの淺草とは一體どういふ慰安を民衆に與へるところか。或日の日曜を利用してこゝを訪ねた。

上野の驛から地下鐵に乗つて淺草へ……、このコースを辿るべく上野驛へ着いたが、この頃の上野驛は荷物の山人の海だ。一年を通じて寸分の隙がないといふから豪氣なものだ。つまり、今の日本にあるまじき戰爭景氣に煽られて金の誘惑に引つ掛つた國民が鐵道當局の苦惱も察せず不急不要な旅行をする餘計な荷物の遣り取りをするから、驛はこう天手古舞ひに遇はされるのである。さうして淺草の入口上野がもう盛り場だ。省線ガードの下の兩側、それから廣小路へかけての一環に、紛れもない盛り場特有の香いが鼻を衝く。斯様な地上の、その下はどうか、地下鐵に乗らうと切符賣場へ向へば、狭い地下道を三重に曲りくねつて切符買ひの行列だ。そこへ来た電車にはまだ乗れない、二度目の車に乗らうと思へば喧嘩腰だ。正直にして居れば三度目に漸く乗れたが中は詰詰めの超満員。人の吐く息と、發散する汗とその香ひと、押される前後左右から蒸し上げる温かさで、ものゝ十日も水を取り替へなかつた風呂に這入つて居るやうだ。電燈の光りも曇り勝ちな車内の空氣、それが水でありわれ／＼が魚類であつたら、丁度泥水の中へ這入つて居るのも同然だ。炭酸ガスに弱いものは、この中で凡そ二十分も居らうものなら卒倒することは

必至だ。肺結核は空氣傳染と聞く。さうして國民の何割かこの結核の保菌者であるといふ日本の國民生活の中に、この不衛生極まる場面を見ては、世界文明國中第一の結核死亡率を持つて居るといふ學者の警告がはじめて首肯される。魚は水によつて生きる。人間は空氣によつて生きる。水の汚れは魚に死を強ゆると同様、空氣の汚れは人間の致命的條件だ。

こうして命がけで電車に乗つて、さて目的の淺草六區でどんな慰安が與へられるであらう。蘇生した思ひで地上に抜け出た。繁華な淺草に一步を印した。デパートの松屋の屋上で、一息ついてそれから觀音様でもお詣りしてと思ひエレベーターに立ち向ふと、四つのエレベーターには二重になつて行列を作つて居る。その後について順番を待つて居れば、屋上へ上るのに夜が明けるかも知れぬと思はれるので、階段を上ることにした。その階段が上り下りの雜踏で、一段上つて一休みといふ爲體だ。二階まで上つたが餘りの苦痛に屋上行きは中止した。併しもとの一階へ引き返すのが又一と苦勞だ。漸く息づまるやうなそこを飛び出して、外へ出て外氣を一息大きく吸ひ込んだ時の、心持ちの爽かな清々しいこと、といふよりも清淨な空氣の有り難味がはじめて分つた。

雷門に立つて觀音様の山門を眺める。參道ともいふべき一直線の仲見世通りは、立錐の餘地なき人だ、歩いて居るのか立ち止つて居るか、一向前へ進まぬやうだ。この中へ這入つて二三町の觀音様まで辿りつくには、一時間はたつぷりかゝると思はれたので、觀音様には濟まないが、この情景を見ただけで、お詣りする勇氣は出なかつた。

それから目的の映畫街だが、そこへの道すがら、兩側を見て歩くと軒並若しくは一軒置き位に飲食店だ。それが古風に言へば小僧中僧番頭且那と、資格階級に應じて眺へ向きにいろ／＼に出來て居り、併かも食事の時間前であるの

にどの店も客で一杯だ。そこへ這入り切れないうで大道へ溢れた客でもあらうか、日中露店の屋臺車に列を造つて何かを喰つて居る。こういふところだけを見て居ると、淺草といふところは、物を食ひに来るところのやうに思はれる。覗いて見ると、その不潔さ言はん方なく、朝鮮か支那の労働街を思はせるのである。こういふところで物を食ふことが果して慰安になるのだらうかと、いろ／＼に考へつゝ或映畫館の前へ立つた。それも軒外れで、數十軒の街をなして居るところへは、到底人込みで這入れない。切符は賣るが、もう開場前から満員で、第一回が終るまで薄暗い廊下で待つて居なければならぬ。劇場といふものは、二つばかり尋ねて見たが、矢張りさうだ。兎に角それを承知で、あの映畫館の中へ這入つたが、こゝはたつた今さき苦しんだ地下鐵の車内その儘だ。暗いだけに尙我慢が出来ない。それを神妙に大勢の人は待つて居る。約五分がほど、われも人と同じく待つたが、汚れた空気は糞尿よりも汚たないと教へられて居る筆者は、神経か知らんがなんだか頭が痛くなつたやうな、或は又胸のあたりが妙に氣持が悪くなつたやうな氣がしたので早速飛び出した。次いで外れの大きな劇場へ飛び込んで漸く末席を占めた。無慮何千といふのだらう。よくもこんなに澤山の人が、いつの間に集まつたかと思はれる位、さうして極めて面白さうに観客は見入つて居る。泣いたり笑つたりして居る。日本のあらゆる興業の呼吸は、泣かすことが上乘であり最も客の人氣を引くのださうな。話の筋が事實と違つて居やうが、世道人心に害あらうが、そんなことには頓着はない。只泣かしさへすれば興業の目的は達せられるのださうだ。

若い踊子の跳ね廻るのも面白い、甘い／＼メロデーや、狂はんばかりのジャズの音は、現代青年の魂を奪ふのに持つて來いの仕掛けだ。

さうしてこの劇場の廊下寄り各所は悉く飲食店だ。多くの客は芝居の幕間には、海嘯のやうに各食堂へ押しかけて盛んにものを食ふ。中には幕間毎に食つて居る連中もあるが、よくもあんなに食べられるものだと驚かされる。言ふまでもなくこういふところは、びつくりする程高い。今凡ての物價が公定されて居るのであるが、飲食物に至つては如何にでも公定の網がぐらられるらしい。事變前の三倍五倍だ。家庭で作れば五十錢位の料理が、こういふところでは三圓位が普通とされて居る。それで大して旨くもないものを盛んに食つて居るから、こういふ客の氣が知れぬといふものである。彼等がその職場で得るところの金錢に、一錢の間違いがあつても承知せぬ。然るにこういふところへ來て、五倍六倍の暴利を食はられても、一向氣にも留めず喜んで拂つて居る。さうして、汚穢目を蔽はしめるこの不潔な場所で鱈腹喰べて、それで芝居が終つて外へ出てから又食ふ。恐らく一年分位を、一時に食ひ溜めして行くのだらうと思はれる。さうして、薄暗い電柱の下に、「お國のために國債を買ひませう」と悲しく書かれた立看板に、誰一人目をくれる者はないやうだ。

私は、この看板の前に立つて、行き交ふ人々をつつく／＼見較べたのであるが、これが全日本の縮圖であつたら、もう世の終りではあるまいかと、とめどもない落涙をどうすることも出来なかつた。さうして、心からの感謝と、敬虔の念を看板に捧げて、「これはこの場だけの様相である。こゝ以外の日本は、健全そのものである。恰も身體のどこかに腫物が出来たやうなもので、その腫物が、この場の有様で、他の部分には一點の瑕瑾もない健康そのものである」と、幾度か／＼辯明するのであつた。併し私の辯明は、甚だ心もとなきものであつた。けれども小さき私の、日本人としての自覺は、それを餘義なくさせた。



この浅草へ吸ひ込まれて、眼中胸中時局なきが如き観客は第一回の芝居がはねて、どつと押し出されて『あゝ面白かつた』とその儘歸途につくものは殆どない。上下大小の飲食店へ飛び込む者あり更に二度三度と映畫館へ這入る者もある。こゝらの料理屋、どれを覗いても、大入満員の盛況で、中には飲食店の前に行列を作つて居るところもあり、客の方で頭を下げて食べさせて貰ふ始末。だから商賣して居る方では、一錢一厘の引つ掛りもなく悉く現金で、凡そ世の中の金を全部こゝへかき集めて仕舞ふのでないかと思はれる位だ。さうして戦時特別税で、飲食税を飲食代と同時に取るのださうだが、この商人達果して正直に税務署へそれを申告して居るかどうか。多分に疑はれてならないのである。

こうして夜十一時、遊興飲食店の營業時間一ぱいまでは、この浅草界隈は人の海だ。一體こゝへどの位の人間が毎日集まつて来るものだらう。こゝを管轄する象潟警察署の調査によると、ふだんの日で一日十萬人、日曜祭日になるとその三

倍即ち三十萬人の人が出るさうだ。

三十萬人の出入、一望の下にそれを眺めたら、どの位のものだらう。靖國神社の大祭には三十萬人の人が出るさうだ。遺族だけでも二萬人以上全國から集まるのだから、それも入れて一日三十萬は、さこそと思はれる。この日に若し、九段坂上に立つて見るならば、坂から境内へかけての人の山、坂下から神保町、駿河臺下へと大河のような人の動き、凡そ人の集りの多いのに驚かないものはあるまい。これが三十萬の出入だ。併し九段の出入は、靖國神社へお詣りすればさつさと歸つて行く。こゝには盛り場もなければ娯樂機關もない。であるから、こゝへ来る人は平均してものゝ一時間も居れば入れ替るのだが、浅草の出入は物を見、物を食ひに行く、だから時間がかかる。

中には朝から夜遅くまで居る者もあるが、早い者でも五六時間はこゝを動かない。平均して八時間は、こゝへ集る人は時間を潰すと云はれて居る。して見れば同じ三十萬でも靖國神社は一時間で立ち去るのであるが、浅草は八時間居るから、浅草の一日を一時間に詰めれば、靖國神社の八倍の二百四十萬が集る勘定になる。

この人の海に終日過ごして、人々は何物を得るであらうか、束の間の、その場限りの面白き慰安もあるであらう、然しそれは、この盛り場を去れば何の餘韻もないこと、例へば美食が咽喉を越したと同然である。こゝは一つの社會教育機關、せめてこれ等の興業を觀て、「世は非常時代、うつかりしては居られぬ」とか、或は又、「今が御奉公に絶好の時期だ、國家のために何かの奉仕をせにやならぬ」位の感じでも興へてくれれば、不潔極まる環境でも幾分存在の意義はあらうが、併し一ヶ年を通じてこゝへ日参して居ても、そんな奇特な考へを起させてくれるやうなところは、何軒あるであらうか、戦争のために商賣といふ商賣、職業といふ職業は、悉く統制の重壓に喘いで居る時、こゝ浅草

などの盛り場は、統制や不況はどこ吹く風ぞと、恰も好景氣に陶醉して居るかのやうである。

日本は今、體位向上といふことが、重大なる國策の一つであることは誰知らぬ者はない。その國策下に於て、泥水の中へ這入り込んで、不必要不衛生極まる食物を、法外な價格で賣り付けて零細な國民の財的餘裕を根こそぎ搾取されるとは知らず、その上清き青年男女の心理を腐爛せしむる盛り場だけは、皇國の現狀を想ふ者の、決して足を踏み入れるところでないと思はれた。淺草の娯樂は、實は娯樂でなく端的に言ふならば「遊興」である。この遊興のために數十萬の人間が毎日こゝへ落す金はどの位になるだらう。假りに一日十五萬人の人が集まつて平均五圓づゝ消費するとすれば、一日七十五萬圓、月に二千五百五十萬圓、一年にはなんと二億五千八百萬圓となり、假に一臺十萬圓の戰闘機が、二千五百八十臺出来るほどの金を、惜しくも「どぶ」の中へ捨て、仕舞ふのである。これに東京では銀座、新宿、澁谷其他の盛り場で散財する金を正確に合計したら、蓋し驚くべき無駄使ひを東京人はやつて居ることが判明するだらう。さうして日本全國で遊興飲食のために費す金は一ヶ年七億と大藏省で調べて居るが、この調査は何によるものか、若しこれ等の業者の申告によるものであるとするならば、彼等は餘程正直なもので半分は胡魔化すと言はれて居るから、果して事實とすれば一ヶ年拾四億の金を、無意義に蕩盡して、國民各自の體位を低下せしめつゝあるのである。

平時十萬の人出、この現實は又、一國の生産力をそれだけ低下せしめて居る。何となれば、淺草へ遊びに来てゐる間は仕事を休んで居ることは勿論だからである。地方人の淺草見物、それは至極僅かな人數で、十萬人の大部分は各職域で生産に従事して居る人々が少くないのである。彼等の雇主は「彼等は遊ばんがために働いて居るのだ」と

察して、こうした遊興機關の存在を是認して居るかも知れないが、併し遊ばんがためには、收入の多きを望み、遊ぶためには休業は必然的だ。結局政府が働かさんがためにこうした遊興機關を認めて居る趣旨に反することの、餘りに甚しいものと考へられるがどうかやらう。

國民の慰安は必ずしも、所謂娯樂機關に待たなければならぬことは斷じてない。年齢の如何を問はぬ。男女の別を論ぜぬ。私は今年十三歳の少年を子に持つ。一週一度の日曜日、天候にして悪からざれば、たまには親として一日の慰安を興へてやりたい。で問ふ、「あすの日曜は一つ映畫でも觀に連れて行かうか」「いや」「淺草はどうだい、新宿はどう、それともデパートか」「いや」「では銀ブラでもして立派な料理屋へでも行つて、うんと旨いものを食はうか」「さや」「ちやどうすればよい」と切り詰めて聞く、子供の曰く「僕に握り飯五つ造つて下さい」と頼むのである。釣に行かせてくれと言ふのである。それを快諾して前晚に握り飯を注文通りこしらへてやると、朝の四時に起き出で、件の握り飯を二つがほど平らげ、水をかぶく呑んで、釣道具を整へ、自轉車に乗つて疾風のやうに飛んで行く先きは、自宅から二里以上もある洲崎の海岸だ。

それから午後五時まで正味十二時間彼は、一本の竿に精根をぶち込んで、太平洋上の大氣を、思ふ存分満喫しながら、悠々釣の禪味に浸るのである。さうして夕刻眞黒く日に焼けて、凱旋兵士のやうに威風堂々歸つて來るのであるが、空腹の夕餉を忘れて、五匹か六匹の「ハゼ」を夢中になつて自ら料理する。あれを頂戴これくれと、世話の焼けること夥しいが、彼は出來上つた甘露煮を家族の面々に分配する。それも父には一番大きいのを、自分の前には一番小さいのを据えてゐる。こうしてわが家の晩餐を賑はしながら、その日の報告をするのである。「もつと大きいの

が釣れたんですが、隣に居たおちさんが一匹も釣れないので賣つてやつた」「赤ん坊をおぶつて来て居る人もあつた」「おちさんとおばさん（若夫婦らしい）で来て居る人もあつた」「大きなボラが釣れたんだが糸が細くて落ちてしまつた」……、無暗に残念がるから「そりや惜しいことをした、今度は強い糸を持つて行くんだね」と言へば「僕ぢやない、そのおばさんですよ」と笑はせる、兄坊、啣んだ飯を吹き出して時ならぬ霰を降らせば又一回は笑ひ崩れる。

家内中調子揃へて大笑ひ　これ天然の音楽の聲。

浅草の音楽は金がかゝつて身體を悪くして精神に邪氣を吹き込むが、この音楽は金は一文も要らず、身體が丈夫になつて子供の情操教育に持つて來いだ。この少年、釣を以て無上の慰安として、あらゆる卑俗な趣味や娯樂に關心を持たぬ。

この子供が今にどうなるか、われ／＼の子供のことだから、どうせ偉い人間にはなれないかも知れぬが、併し私はこの野育ちの自然児が、この儘順調に延びて行けば、少くとも「ずるい」人間にはならないだらうと信じて居る。思慮の定らぬ感情生活が凡てある子供でさへ、その慰安には必ずしも世の所謂娯樂や遊興を要とせない。況んや成年の男女にして、一月一日の勞を慰むるに、邪氣と臭氣の横溢した、盛り場でなくしはならぬといふことは、どう考へてもあらう筈がない。

日本は今國民の思想に何を求めて居るか、戦争だからとて呑んで大に働けとばかりは言はぬ。われ／＼の時局を解決する國民精神は「堅忍持久」の四字に盡きて居る。ぢつと我慢をして根強く建設されて行く事變のための底力を作ることにある。その時われ／＼の慰安は、一服の香に陶然となり、溪川のせむらぎにその耳を傾くる底の、趣味を以て

すること十分であらうと思ふ。

人間の造つた娯樂は、兎角人間を溺れしめる。これに反して自然の娯樂は、人間の身心を清掃して、自然の如く人間を純眞の境地へと導く。さうして森羅萬象悉く、われ等が慰安の對象たらざるものはない。

一五、餘計なものはなんでもぜいたく

夢遊庵記

東京銀座のさるコーヒ屋、これは喫茶店とも稱して地方人には分るまいが、都會の人は、西洋の茶を呑んで西洋の菓子を食ふことがこゝ十年來大流行だ。でわしも都會人の端くれ、さるコーヒ屋へ這入つて或日コーヒを呑んだ。後ろに四五人の中學生らしいのが、矢張り吾輩とおなじでコーヒを呑んで居たが、その中の一人が「オイ君シイをくれ」と言つて居る。シイつてなんのことかと連中を顧れば、たばこのことだ。シガレットの略だ、よく見ると勉強ざかりの學生が一つ五十錢もする西洋菓子をばくついて、そして盛んに巻煙草を、併かも尻から煙の出る程ふかして居る。更に念入りに彼等の指先を見るとたばこのやいで赤眞になつて居る。拙者が不審に思つたのは、俺共の中學時代にはたばこを吸ふと巡査に叱かられるので、下宿屋か便所の中でなくては吸へなかつた。つまり未丁年の者は禁煙といふ法律があつたが、今はその法律が煙のやうに消えたのか知らんと不思議に思はれたのである。私自身が大の愛煙家だから他人にたばこを吸ふなといふ資格はないが、自分の悪いことを棚に上げて言ふ譯ではないが、學生の喫煙

はあまり感服出来ない圖だと見た。ところが、その向ふの隅の方で二人連れ若い女、モーダンガールと言はれて居る洋装の女、脛を組んでこれも盛んにたばこをふかして居る。吸ひ込んだ煙を直線に吐いて見たり輪を畫いて見たり、その得意さ、寧ろ滑稽であつた。

こういふ情景の中に納まつて外を見ると、この店の前の電柱に立看板がある。文字は極めて解かに「ぜいたくは敵だ」とある。

この看板に、若しも口があつたら必ずこう言ふだらう。

「そも／＼日本の國は曠古の大念願成就にいま國を擧げての戦争だ、戦争には制限のないほど物が要る。で七・七禁令といふもので一切のぜいたく品の製造を差し止められた。御承知のことと思ひますが、そして十月七日からはぜいたく品を賣ることをさへ堅く禁ぜられた。そこでこの私は街頭に立つて四六時中ぜいたく相成らんと叫び通して居るんであるが、まだ皆様のお耳に止りませぬか。そこでたばこはぜいたく品であるかどうか、若しぜいたく品であるとすると、矢張り七・七禁令に觸れる譯だが、然し政府でどし／＼製造して居り盛んに賣つて居る。で、たばこを吸ふ人と言はせたら「ぜいたく品に非ず」と言はれるであらう。だから私は「皆さんたばこは遠慮して下さい」と、電車の車掌みたいなことを申しませぬ。申しませぬが、修業最中の學生さんや、うら若い御婦人方のたばこ吸ひは、どうも贅澤品のやうに思はれて仕方がない、どう頭をひねつて見ても私の領分のやうな氣がする。どういふもんぢやらう、間違つて居るでせうか。皆様の御智慧を拜借したいのである」

と彼看板子は頻りに辯じて小首を傾けるのである。稍あつて彼は、何ものか心に決せるものゝ如く一段と聲を張り

上げて語を續けるのであつた。

「私は今の世の中で、こうしてぜいたくの目付役を承つて居るのであるが、この役目から世相を観ると、どうも法律規則一點張りでは參らぬことが多いのに日々思案をさせられるのである。現にたばこがさうだ。これは御承知の通り政府で示されて居る贅澤品の中へは這つて居らぬ。であるから製造もされ販賣もされて居る。であるから又御婦人方でも、學生さん達でも、丁年以上の人は吸ひ放題といふことになる。これは言はゞ皆様の法律生活といふものであらう。けれども、贅澤品といふのは今の法律で定められた高價品とか高級品とか、或は又貴重品とか名づけられるものばかりであらうか、その贅澤品なるものゝ本質は、殊に今の非常時が消費使用を禁じて居るのは、法律生活をして居られる皆様は、金銀寶石をちりばめたやうな、値高いものばかりが贅澤品だとお考へになつて居るかも知れませんがこの目付役に言はせて頂くなら、高價高級品も勿論贅澤品には違ひはないが、いくら値段が安くても必要のないものはその人にとつて凡て贅澤品である。即ち「餘計なものはない」と、私は思ふのである。

もと／＼この七・七禁令と申すのは、戦争のために制限なく物資が要る。そこで、戦時に必要な物をこしらへるがために使ふ物、それからお互が働くために生活するために必要な物、こういう物資以外の一切の物は、この際こしらへたり、使つたりさせぬ方針でつくられた法律である。だから字句に並べた禁令の項目よりも、この法律の精神といふものを、國民としては考へなくてはなるまいと思ふ。こりや私に言はせると、皆様の國家生活といふのである。

高貴高價な品物は、たとへ使用差支へなしと言はれても、貧しい人には使ふすべがない。だから、所謂贅澤品といふのは、國民としては、ほんの少數の人達だけ、即ち一億の國民の中の萬分の一、何十萬分の一といふ僅かの人に使



用を禁ぜられることになるので、大部分の人はこの埒外にあると言へるでせう。ところが物資の政策といふのはその數量に重點を置かれてあるのだから、法の利き目は一般大衆に向けられたものが多い譯である。もう一つ、たばこは人によつて贅澤品であり必需品であるといふことを強調して見たい。

たばこの人體に於ける有害無害、有用無用といふことは、専門家の意見が今までに區々である。専門家でなくても、たばこを吸はぬ人は、態々高い金を拂つてなんのために煙を呑むのかと無用を主張なさるであらう。丸でたばこ代はどぶに捨てるやうなものでないかと言はれるかも知れぬ。尤もな話だ實際それに違ひない。ところで茲に「夢喰ふ蟲も好き〜」といふ現實がある。蟲は多く甘きに集まるが苦い夢に集る蟲もある。人間も嫌ひな人から不審がられるたばこを好む人がある。これは夢の蟲のやうに生れつきではないが、一度その味が分ると容易に離すことが出来ない。さうしてお醫者さんが何と言はふが、兎に角たばこに習慣付けられた人は、疲れ

た時の一服はたしかに慰安になる。害なりと言ふ人もあるが、酒のやうにたばこを呑み過ぎて死んだといふ人を見たこともない。

けれども呑まぬに越したことはないから、未丁年の人やお婦人方は、努めてこの習慣に染まらぬに限る。と申すのは、一度染まつたら、ニコチンの魅力から離れることが出来ないからである。殊に日本の社會で御婦人方の喫煙は、決して見よいものでないばかりでなく、反つてその人の品格を下げることにこれより甚しいものはない。そこで若い人達は好き好んで「たばこ呑み」の練習をなさる理由はどう考へてもあるまいと思はれない。

愛煙家の甚しいのになると、三度の食事を二度に減しても煙草を吸ひたいと言はれるが、こういふ習慣は一體先驗的か後天的かといふに、私の聞き及んだ或學者の説では、酒は母體の飲酒が胎兒にその習性を作るが、煙草は決してさうではない。その人の體質によるが普通二十歳以下で煙草が好きになると一生やめられぬ。二十歳以上から煙草を呑み始めてもほんとに好きになれぬ。止めようと思へば何時でも止められるさうだ。して見ると二十前後の勉強が生命である學生さん達が、將に習性を作らうとするその年頃で、無くてもこと足るたばこを、學資の一部分を割いてまで吸ふ必要は、先づなからうと思はれるが、殊の外物資の大切な戦時の今は、御國のため皇軍のために斷然止めて貰ひたい。私から言ひますれば若い御婦人や、あなた方學生さんの喫煙は前述のやうな譯合ひで贅澤品でありますぞ」と結んで彼は、相も變らず「ぜいたくは敵だ々々」と往き交ふ人に呼びかけるのであつた。

これを聞いた俺は、なる程々々と感服させられて「なぜ俺は若い自分に、生意氣でたばこを吸つて見たか、あの頃若しこの生意氣を起さなかつたならば、今頃こんな煙草を嗜むほど好きにはならなかつたであらう」と後悔臍を嚙

み、せめて今日只今から節約をしよう。これから家へ歸るに二時間かゝる、その間だけでもたばこを止めて家に歸つてからゆつくり吸ふことにしよう。

それにしても、どうして今日のやうにたばこが缺乏して居るのだらう、たばこは日本で出来て自給自足が出来ることがあるのぢやが、これは戦争のために葉煙草耕作の勞力不足が原因か、又は製造不足か。不思議に考へられてならないので或時調べて見たら、次のやうな驚くべき事實を發見した。

その調べた結果に依ると、たばこの製造が減つて居るところか事變よりずつと殖えて居るのである。どの位殖えて居るかと言ふに左の正確なる數字によつて證明出来る。(單位百萬本)

	昭和十二年度	昭和十四年度	昭和十五年度
口 付	一〇、四八五	一一、三四五	一一、九二九
兩 切	三〇、一〇七	三五、七七八	三八、四五二
計	四〇、五九三	四八、一二二	五一、三八一

この統計によると、事變勃發當年の昭和十二年よりも昭和十五年は、二割分上の増加を示して居る。斯くたばこの製造が殖えて居て、たばこ飢饉がどうして起つたかといふに、凡そ三つほどの原因を擧げることが出来る。第一は世間に金廻りがよくなつて人間の移動が烈しくなつた。それはどの汽車も超満員で鐵道が困り抜いて居るほど旅客が多くなつた事實に徴して明らかである。さうだどすれば家に居て刻煙草で我慢したものも、殊に農家の人達までが、卷煙草を吸ふやうになる。よく市井で見受ける圖だが煙草を啣へながら力仕事をして居る人がある。一定の仕事が済

んで、休憩の時間に一服ふかして、疲勞を休めたらよかりさうなものだと思はれてならない。こうした消費の増加が相當なものであらう。

第二はたばこの買ひ溜めである。數年前のたばこ飢饉に、世間が餘り八ヶましくなつたので專賣局では色々遣り繰りして、東京市中へのたばこの配給を二割ほど殖やしたことがある。すると増加された配給たばこが一時間で忽ち賣切れになつた。そこで小賣店ではこの調子では五割乃至八割位増して貰はなければ間に合はぬ。一割や二割の増配では焼石に水だと迫つた。大體專賣局の配給は五日に一回配給されて居るが、それが一時間で賣れては後の四日は又候たばこ飢饉で騒がれる。小賣店の八割増配要求も無理はない。併し專賣局としても東京人だけに満足を與へる譯には行かぬ。全國相手だ。でさう急に五割八割の増配は出来ないで取り敢えず第二回の増配に前同様二割見當にした。ところが不思議や又々一時間で賣切れかと心配して居たら、今度の増配ではたばこがだぶついて、たばこ飢饉が解消した。どうしてこうなつたか、それは不思議でもなんでもない。前回の増配の時に消費者がたばこ飢饉に備へんがために買ひ溜めをやつたからである。中にはたばこ屋へ「なぜたばこを賣らぬか」と怒鳴り込んで来る客の顔を見るとたばこをぶか／＼ふかしながらやつてくる。無くて買ひに来るのでない。無くなる時に備へんがためである。特殊商人よりも一般大衆の買ひ溜めの恐るべきこと斯くの如し。

第三は學生、婦人乃至は若い職工など新奇の煙草吸ひが殖えて來たことである。吸はなくてもよい人までがたばこを吸ひ始めたのであるから、以上その原因が合流して潮をなしてたばこ飢饉の勢ひを烈しくした譯だ。これではいくら專賣局でたばこを増加してもたばこ飢饉は収まらぬ。この現象はたばこばかりでない。米などもさうである。即ち

農相に、「今年の米の作柄は決して悪いことはないが、一方消費の方はだん／＼殖えて来るばかり」と思案投げ首をさせて居る所以である。

たばこなどは、立看板子の言はるゝやうに、既に習性になつて居る人には、止められぬ寧ろ慰安になるとすれば、それは一種の生活必需品である。併し不要の人には反つて贅澤品となるのである。「餘計なものなんでもぜいたく」だから、國を想ふの一念ある人は、即ち吸はなくてもこと足る人は贅澤品のたばこに接近せぬことだ。さすれば事變で今まで煙草を吸ふ人が減つて居るのであるから、國內にはたばこ飢饉の起る譯はない。新體制の究極の目的は萬民時局に目覺めて大政を翼賛し奉ることである。而してたばこが贅澤品である人もあるのである。この時、「日本人ならぜいたくは出来ない筈。」

更に進んでは、煙草を好む人達も、非常時局に鑑みて節約といふことを考へて貰はにやなるまいと思ふ。第一は、『歩行禁煙』こりやどうぢやらう。五里十里の長道中をするならばいざ知らず、五町や六町の町中を歩くにも、口から、煙草を離せないといつては、少くともそれは非常時國民とは言へないであらう。それから汽車や汽船で無暗に煙草をふかすのは、疲勞の慰安に吸ふならまだしも、退席紛れに、しつかりなしに吸ひ續けて狭い車内や船室は煙で一ぱいだが、室を閉め切られたさういふところは、さらぬだに人の吐き出す炭酸ガスで、恰も汚水のやうに空氣が汚れて居るのである。その上更に煙に攻められては、子供や婦人はたまつたものでない。公德の上からも、これだけは慎まなければならぬ。それから酒を飲みながら矢鱈に煙草を吸つて居る人がある。ニコチンはアルコールに一番溶け易いので、一杯飲んで一服吸ふなんて、見る／＼自分の墓穴を掘つて居るやうなもので、完全に嗜好に溺れた人であらう。

一六、金は至尊の象徴なり

今の世の中に存在するもので、金ほど重要な役割を勤めて居るものは、恐らくあるまいと思ふ。金はもと／＼人間のことしへたものであり、金それ自體は死物であるが、人は金のために奴隸のやうに働かされ、自縄自縛の憂き目を見るのである。即ち今日世界の混亂、それから慌しい人の動き、それ等を煎じ詰めて見るならば、言ふと言はざるとに拘らず、結局『金のため』である。若しさうでないと言ふ者があるならば、これ等の混亂と人の動きから、金に關する一切のものを差し引いて見るがよい。混亂忽ち静まり、人の動きは即座に停止するのが何よりの證據である。即ち『只で働け』と言へば、不思議に人は、働らくその手を止めるであらう。それと反對に『汝の給與を倍額にする』とでも言はうものなら、人は命ぜられずして、淋漓と流るゝ汗をも忘れて夢中で働く。また鬼やうな強情な人間でも一度び金にものを言はせれば、打つて變つて佛のやうにその態度が和らぐのである。實に金こそは、絶對至上の權力を持つた無言の指導者であらう。

自らを欺いて『俺は金のために働くのではない』と、動もすれば見榮を切る者がある。古往今來この世の中が續く限り、たとへ木の葉が沈んで石が浮かうと、働らいて金を得ることがなんで悪からう。悪からうのは、働かないで金を得ることではあるまいか。眞面目な社會に今も言はれて居る通り『人間は汚なく働いて美しく食べるもの』だ。汚なく働くとは何か。汗や埃に身の汚るゝを厭はず一生懸命に働くことだ。美しく食べるとはどういふことか。額に汗し



て得たその金で、衣食せよとの人の世の誠しめである。古來日本武士道の鐵則である「渴しても盜泉の水は飲まず」といふことは、この誠しめを、更に力強く裏書したものである。人は、得る時の辛苦を忘れて、不用意にも「金は天下の廻りもの」だとか、或は「江戸ツ子は宵越しの金は持たぬ」などと言ふ。さうして袖やズボンのポケットに、石ころか紙屑のやうに金を投げ込んで居る人もあるが、その身の汗と油を以てせざれば、購い得ざるものであるといふことに、考へ及んだ時、それでも金を粗末に扱へ得ようか。金をお寶とも言ふ。人間この上なき貴重なるものであるからである。これあるが故にわれ／＼は、親を扶け妻子を養ひ世間の義理をも果して得て、皇御國の御奉公も出来るのである。尊き極みであり喜ばしき限りである。純情素朴な地方の人達の、金の扱ひ方を見て居ると、渡す時にも受取る時にも、さも尊さうに頂いて受け渡しする。何が故にさう尊ぶのか、金あるが故に人間としての體面を保てる大切なものであると同時に、その金

の中に刻まれてある菊花の御紋章に、あつき敬虔の念を捧げるのである。

昔から、われ等日本人には、それ／＼定紋といふのがある。これは家紋とも言ひ、世界に例のない日本だけの制度である。もと／＼これは、氏族の記章で、それによつてその家柄を象徴したものである。これが今日も尙用ひられて萬邦に秀づるわが家族制度の形式をなして居るのであるが、わが御皇室に於かせられては、後鳥羽上皇の御頃、菊花の文様を以て御紋章と定められ、爾來今日に至るまで、下萬民への目標とせられて居る。即ちわれ等はこの御紋章を拜すること、大君を拜する如くせよとの謂れである。この尊嚴なる御紋章が、われ等が日常手にする金に記されてあるといふことは、わが日本は、上に御皇室といふ宗家を戴く大家族であるといふことを説明して居るものであり、同時に、われ等に使用を許されて居る金は、とりも直さずお上からの頂物と識るべきである。他國のそれとこと違いたとへ一錢と雖もわが日本の金は、仇や愚そかに出来ないのは、斯る因縁に基くのである。この道理で、金を弄んだり粗末にする者は、臣下の分を忘れた者と言はなければならぬ。のみならずさういふ人は、結局金のために一身を誤ることにならぬとも限らないのである。そこを照憲皇太后は

持つ人の心によりて 實とも仇ともなるは 黄金なりけり

と、御歌にお詠みになつて、下々のわれ等をお誠しめになつた。まことにその通りで、身を興こすのも亡ぼすのも世間を災するのも益するのも、只一つ、金に對する考へ方心の持ち様できまるのである。われ等は夢寐の間もこの御意を忘れず、尊き金が仇にならぬやうに心掛けねばならぬ。

一七、貯金は國ためわが身のため

金は尊いものであり大切なものである。そこで金を大切にする人は、餘分な金があれば貯金をする。金といふものは手元を持つて居ると、人間を誘惑して遣はさうとする。さうして持つて居ると、減ることはあつても殖えることとはない。その危険を妨ぐがためにまた將來の備へに貯金をするのである。ところで政府は、事變以來盛んに國民に貯金を勤めて居られる。戦争や生産力の擴充のため大へんな金が必要から、國民に無駄遣ひをせず貯金をせよと言ふのである。

この譯が一般の人々に、しつくりと呑み込めないらしい。曰く、貯金といふものは郵便局なり銀行なりに預けて置いて、必要な場合に何時でも引き出すものである。預けて置くのだから遣はれては困る。遣はれては引き出す時に預り主は持つて居ないではないか。然るに政府は、戦争のために貯金をせよとは可笑しい。國民に貯金をさせて戦争のために政府が遣ふのなら、それは貯金だと言つて國民の金を巻き上げるやうなものではないか。といふやうな疑ひを持つ人が往々あるやうである。この疑ひはまことに尤もで、貯金をする人の立場から言へば、それに違ひはない。併しこれを預かる人の立場から言ふならば、貯金をする人は將來病氣をしたり、不慮の災難に遭つたり又は、結婚とか子供の學資といふやうなもののために貯金をするのである。ところが、貯金をして居る人が一度に病氣したり災難に遭つたり結婚したりするものではない。そこで貯金する人全體から見れば、さういふことで金を下げなければならぬ

人は、ほんの一部分の人で、大部分の人は、矢張り預けて置く。その大部分の人の預り金をその儘金庫に仕舞ひ込んで置くことは意味をなさないから、これを商賣したり何かの仕事をする確かな人に貸して置く。さうして、預つた方へは安い利息を拂ひ、貸す方へは高い利息を取る。銀行などはその利息の差額を利益として商賣をして居るのである。政府の方でも郵便局などで金を預かつて、そして政府自身が金が要るときはそれを郵便局から借りるのである。斯様に世の中の金のからくり即ち金融機構といふのは實にうまく出来て居るもので、文明の今日では、人間は夜寝て居ても金は晝夜の區別なく働いて居る。このことを、お五個人の生活に當てて見ると、例へば誰かゝ来て、私の家は狭いので、この品物を明日まで預かつて下さい」と頼んで行く。その後へ又誰かゝ来て「私はその品物を今晚だけ要るのですが、ないから貸して下さい」と頼む。この場合、どうせこの品物は明日まで遊んで居るのであるから必要な人に貸して用をなさしめる。借りた人は、他人の品物を只で使ふといふ法はないから幾分の御禮をする。預つた人は、他人の品物で御禮を貰つてはこれまた法に合はないから自分は預かつたり貸したりする手数を貰つて、残りは品物の持主にやる。

これが品物であるから使へば減るが、金であれば遣つても減らない。貯金の道理もこの例に外ならないので、預ける人は自分が持つて居れば遣ひたくなる火事や盗難に遭ふこともある。さうなると將來の間に合はぬ。そこで貯金をして置けば、入用の時には何時でも返して貰へて、をまけに利息が貰へる。

さうなると銀行の場合は、それで話は分るが、郵便局と雖も政府であるから、政府が、自分で金を預つて自分で遣ふて、それでどうなると、不審に思はれる。併し政府と言つても内輪はいろ／＼で、その銀行の役目をするのは大

歳省の預金部とお札を扱はせて居る日本銀行である。郵便貯金や簡易保険の金は大蔵省預金部へ集つて行く。そこで政府は税金や鐵道や煙草鹽などの収入で國の賄ひが出来ないときには借金をする。その政府の借金を公債と言ふ。その公債證書を大蔵省預金部なり日本銀行へ渡して代りに金を受取る。それで國民が遊んで居る金を貯金すれば、金が入用で困つて居る政府がこれを借り受けて遣ふといふ國民も政府も共に、ためになる貯金であることが分らう。公債は政府の借金ではあるが、併しそれを戦争のために全部遣つて仕舞ふものであり、従つて將來の國民に、長く負擔を残すものであると考へたら大間違ひである。今日の公債即ち國債は、社債や株式と同じく、その大部分は政府の事業資金に遣はれるのである。その事業といふのは、國防國家建設のためのあらゆる事業で、民間では出来ないことは民間と共同でやることなどに遣はれるので、稱して生産力の擴充と謂はれて居るのはそれである。當今では公債で集めた金の大部分は軍事費に振り充られるのであるから、世間一般では戦争に遣ひ果たすのだと考へるのも無理はないが、その軍事費なるものは殆ど三分の二は生産力の擴充に遣はれるのであるから、軍事費といふよりも、寧ろ國防費と言ふべきである。即ち、軍事費の一部分は文通の軍事に消耗されるが、大部分は民間の軍需品工場と同じやうに、軍艦や兵器の製造を軍部直營でやることに遣ひ、或は國營の開墾事業道路港灣の改良事業、船舶建造の補助金、現地の資源開發若しくは助成事業などを一切引くるためたものに遣はれるのである。故に公債は、世間で考へて居るやうな不生産的なことにのみ遣はれるのでなく、物を生み出す生産的なことに多く遣はれるのである。

そこで若し全國民が、出来るだけの貯金をせないと一體政府の賄ひはどうなるか。それが大へんな問題である。そのことは、政府が公債をやつて日本銀行から受取る金は、預金部のやうに國民の貯金が集まつたのではない。さうで

あれば問題はないのであるが、日本銀行の金といふのは大部分は、印刷してこしらへたものである。勿論そればかりとは言へない。例へば、保險會社や銀行や民間の人々が買つた公債の金も集まつて居るが、政府の方でどしどし公債を出されるといふと、それだけでは間に合はぬから、新たににお札をこしらへる。そのお札が、政府の方へ廻つて、それから戦争關係のために遣ふのであるが、一番澤山拂はれるのは軍需品工場などである。軍需品工場へ落ちた金は、賃銀、材料、工場の儲けなどになつて、それが各人の自由に遣へる金になつて來れば、あらゆる方面にその金が散る。こうして國に金が多くなるといふと、金の値打ちが下つて、あべこべに物價が跳ね上る。これが政府では一番困るのである。金の値打ちが下るといふのは、今まで一圓で米が三升買へたのが二升しか買へなくなつたとすれば一圓といふ金が、それだけ値打ちが下つたのである。これを米の方から言へば、今まで一升で三十三錢取れたが、今は五十錢取ることになつて、米即ち物の値打ちが上つたことになる。金の値打ちが下つて物が上がるといふのは、國の中に金が多くなつて、買ふべき物がそれに相應して多くなると、つまり金と物との釣り合ひが取れなくなると、金が下つて物が上る。金の多くなつた割合に物が多くならないからである。或部落へ物賣りが遣入つて來た。賣れ残りの品物を二つしか持つて居ない所へ五六人の人が集まつてわれも〜とそれを欲しがらる。自由にして置けば、高く買って買手が逃げて行くまで商人の方では値を釣り上げる。高く賣つてはならぬと言ふも、こつそり高く賣る、それを開取引と言つて現在やかましく言はれて居るのである。ところが日本の現在は、金の殖える割合に、物が殖えぬどころではない金はます〜殖えて物がだん〜減つて行く始末だから、物價は天井知らずに上つて行く。現に事變前の三倍半も物價が上つて居る。



物價が上るとどうなる。第一は、政府が五十億圓の金で今年一杯賄ふとしても、その間に物價が一割高くなれば、四十五億だけの仕事しか出来ぬ。第二は、戦争のために外國から十億の品物を買はうと計畫して居ても、九億しか買へない。第三は今年三十億の品物を外國へ賣つて外國から金を持つて来ようとしても、日本の物價が高くなつては外國では買はぬ。さうすると収入の豫定が狂つて来る。一方九億も平時より餘分に買つて居るのだから、日本の物が賣れぬとなると、こゝに大へんな問題が起る。それは、外國から物を買ふには、日本の金である紙幣では通用せぬ。それには金で拂ふので、賣るときにも金で支拂ひを受ける。併し一べん／＼金で賣り買ひするのでなく、爲替といふものが出来て居つて、それを金の代りに買つて支拂ひに充て、賣るにも、先方の爲替で受取つて、日本へ持つて来て紙幣にして貰ふ仕組みになつて居る。そこで、この爲替を扱ふ銀行では、日本から賣つた方と買つた方とを差引して不足の時には金を送る。餘る時

は金を送つて貰ふこととして居る。その爲替といふのは日本の紙幣のやうにちやんと價格が決まつて居るのでなく時々變る。どうして變るかと言へば、差引きの不足が出来てもその國に金がなくて送れぬと相手國に思はれると爲替が下がる。あべこべに相手の方からは上つて来る。これを爲替相場といふのである。これも少しぐらいの不足の時には相場に變りはない。要するにその國に金が送れるか送れぬかの信用で、上つたり下つたりするのである。

ところが日本の物價が上つて外國からは豫定より少しか買へず、どうしても買はねばならぬとすると豫定より餘分に金を拂はねばならぬ。一方外國へ物が賣れねとなれば、差引きの不足が大きくなつて、大へんな金を外國へ送らなければ、爲替の相場がぐうと下がつて仕舞ふ。

爲替相場が下がると、相手國の爲替が高くなつて居るのであるから、日本が外國から、物を買ふときには、今までよりも澤山の金を支拂はねばならぬ。そうすると、原料を外國から買つて居る日本では、それがためにまた物價が高くなる。物價が高くなれば外國への賣れ行きはますます悪くなる。さうして爲替の下落といふことだけの原因で、また一度外國との差引勘定に大きな不足が出来て、その不足を金で補ふことが出来ぬとなれば、また爲替が下がつて来て、丁度爲替が下がり日本の國內物價が上がリ、遂には爲替が紙屑同様になつて物價は人間の力で勘定出来ぬほど上つて来る。それを悪性インフレーションと言つて二十八年前の世界戦争の時に獨逸やロシアはさうなつたのである。世界戦争の時に獨逸では物價が十二億六千萬倍も上つて、靴一足に百億圓、ビールなどは飲んで居る中の上つて行く。パン一斤買ふのに背負ひ切れぬほど札束を持つて行かねばならなくなつた。ロシアでは札で物が買へなくなつた。つまり金の値打ちが無くなつたので、嘘のやうな話である。

日本も皆が一生涯命に節約して貯金をせぬと、今に米一升千圓も二千圓もするやうなことになるぬとも限らぬ。さうなつたらもう日本の國は目茶苦茶である。いくら、兵隊が強くて戦争に勝つても、それがために日本の國が亡びて國民生活の安定も何もあつたものでない。

物價の騰貴といふものは斯様に恐ろしいもので政府でも、これを喰ひ止めることにいろ／＼苦心して居られるのである。こういふことになるのも、國民が遣入つて來た金を、自分の金だからとて自由に遣ふがためであるから、それを、貯金なり公債を買ふなり、或は保険にかけたり銀行へ預けたりして、國民が遣はなかつたならば、國民の間に金が少くなり、物價の騰貴を防ぐことが出来るのである。

日本には今どれだけの金が國內にばら撒かれて居るかといふに、事變が始まつてから昭和十七年の三月までに二百六十億圓といふ餘分な金が遣はれて居るから、大部分は國民の手に遣入るわけである。二百六十億といふと、一寸一般の人には計算出來ぬ金で、郵便局や銀行で、ばら／＼紙幣を勘定して居る上手な人に、十圓札で勘定させて、ざつと四十年間かゝるさうである。この大金が五年足らずの中に餘計に國內に躍つて居るのであるから、早くそれを捕へて貯金といふ檻の中に入れて置かぬと、今にどんな悪戯をして、日本國民を苦しめるかも知れぬ。句に言ふ、「田の草は稻の毒なり藥なり」田に雜草が生えては稻の害になるが、それを引き抜いで土の中に入れて仕舞へば、今度はそれが肥料となつて稻の藥になる。

金もさうである。國民といふ田の中に蔓こらせて置くやうに國民に害をなすが、それを引き抜いて貯金といふ土の中へ入れて置けば、今度はそれが國民の藥となるのである。

われ／＼が貯金をすれば、郵便局や銀行では、それを「公債」といふ形に變へて保管してあるのであるが、若しわれ／＼が、初めから、この公債を買へば、郵便局や銀行の手數が省けて、貯金以上に御奉公が出來得ることになるのである。さうして公債といふのは、定期貯金即ち或年限が來なければ引き出せない貯金同様であつて、自分の金が無くなるのでなく、それは一つの財産となつて残つて行くのである。無論利息もつき、いつでも現金に引き換へ得られるのであるから、當分遣ふあてのない金は、貯金にして置くより公債を買つて置く方が、利廻りもよく又、それが戦争などのために遣はれるのだといふことが、まさ／＼と分つて來て、自分もこれで、いくらかの御奉公が出來たといふ、得も言はれぬ喜びの念が各自の胸に湧く。本來ならこの際のことであるから、一錢の金でも餘分があれば、お國のために献金せなければならぬのである。わが身の將來のために貯金をすることは、決して悪いことではないが、併し日本の國は、將來どころか現在只今、興るか亡びるかの大戦争をやつて居るのである。國家あつての國民である。國家が亡びて、どこにわれ／＼の將來があらうか。といふよりも、大君の馬前に死の日を待つわれ／＼臣民に、明日といふ日の、あらう道理がない。

自分の行く先きを考へる前に、自分の乗つて居る船の安全を考へぬ者があつたら、人はその「愚か」さを笑ふであらう。磐石の如き國民の決意、ゆるぎなき決戦態勢とは、わが國土に、この「愚か」者が一人も居ないことである、一人の落伍者があつても一億總進軍にはならない。(をばり)

昭和十七年六月二十五日印刷
昭和十七年七月一日初版發行

【定價金五十錢】

著作兼發行者 前田義雄
東京市芝區田村町二ノ一番地
會員番號二一九〇一八

不複製

印刷者 中島久
東京市芝區濱松町四ノ五

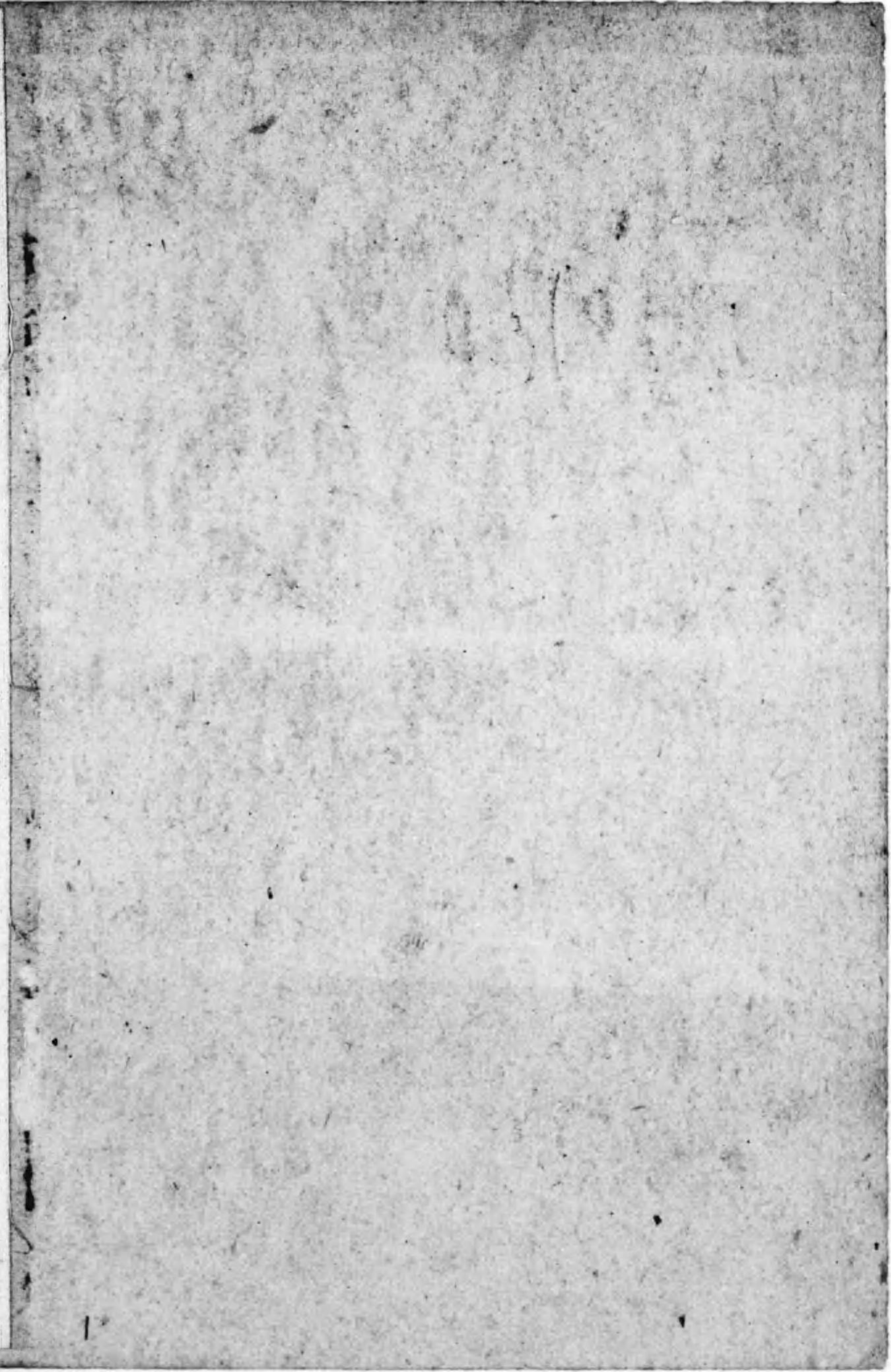
印刷所 甲子社印刷所
東京市芝區濱松町四ノ五
電話芝(43)四三〇六番
會員番號一〇五八番

發行所 帝國軍事協會
東京市芝區田村町二ノ一番地

電話銀座(57)二九三番・四三三番
振替東京九七一四一三番

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

933
350



終